
アカハラが飛ぶ島

KJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカハラが飛ぶ島

【Nコード】

N2456Y

【作者名】

KJ

【あらすじ】

主人公ー八条鮫我は生まれながらにして”ある才能”を身につけた、17歳の天才青年である。しかし彼は天才であるがゆえに世間から嫉まれる対象となって、これまでをすごしてきた。そんなある日彼は今の生活から抜け出そうと旅に出ることを決意する。しかしその旅は彼に絶望と救いの両方を与えるものだった。

彼の周りでおこる”見えてしまう絶望”そしてその犠牲となっていく、”大切な人達”。

はたして”見えてしまう絶望”とは！？そして彼は”大切な人達

”をその手で救うことはできるのか!?”

アカハラが飛ぶ島 < 雛ⅠⅠ > (前書き)

はじめまして今回初めて投稿させていただきます、KJです。皆さんの作品を読ませていただいて、「自分でも小説を書きたい」と思い作品の制作、投稿をさせていただきました。長ったらしい文章で構成した作品となっていますが、なるべく読みやすく、そして面白く作ったつもりなのでどうぞ最後までよろしくお願いします。

アカハラが飛ぶ島 < 雛 1 >

目を閉じると今でも二ヶ月前の光景が脳裏に蘇る。

「なんでだよ！・・・なんであの時“きり”の誘いを断ったりしたんだよ！・・・お前があの時こいつの誘いを断らなかったら・・・“きり”はこんなことには・・・こんなことには！」

「やめないか！これは列記とした事故じゃないか！」

あの時俺は学校の正面玄関で、嘆き悲しんでいる男友達と、恩師とも言えるこの学校の先生、そしてこの事故がおこるまで、数少ない女友達であった一体の死体―さいとう・きりん齊藤姫凜を見つめていた。

姫凜の死因は事故死だった・・・

学校の三階教室で年下の女の子数人と鬼ごっこをしていた姫凜はベランダで足を滑らせて落下した、運の悪いことに落下先である正面玄関の横には樹齢四十年は越えているだろう大木があり、落下の際その大木の幹で頭を強打し死亡・・・

俺はそのとき図書室で年下の女友達と本の整理をしていた。

しかし、姫凜が俺に対して言った最後に言葉は、今でもハッキリと耳に残っている・・・

「ねえ！これからグラウンドで恒例の隠れ鬼するんだけど一緒にしない！あんたが入ってくれたら丁度人数揃うんだよね！」

隠れ鬼とは、基本的には鬼ごっことかくれんぼを融合させた遊びで、俺たちが考えたこの遊びには参加者が最低でも十人は必要で、この時はすでに九人の参加が決まっていた。

その言葉に対して俺は、

「ええー今日はパス、今日はなんだか図書室に行きたい気分だからな。まあまた今度誘ってくれよ。」

そういい俺は姫凜に背を向け一階にある図書室へ向かうため階段へと歩を進めた。

あの時しっかりとこの後姫凜がいうことを聞いていて、一言でも

注意していればこんなことにはならなかったのかもしれない、

「しょうがない・・・そんなじゃ三階で鬼ごっこでもしますか・・・」

そうして数分後姫凜は落下した。

もし俺が隠れ鬼に参加していたら、姫凜はグラウンドで遊び、落下することもなかっただろう・・・

俺はこの日以来、この“偶然”に苦しめられた。

しかし、その“偶然”はこれまでの二ヶ月間で次々と起こった。

まず、二ヶ月前に嘆き悲しんでいた男友達は自分の家の自室にて自殺し、事故のあった日一緒に図書室で本の整理をしていた年下の女友達は学校の下校中にて行方不明・・・

その他にも友人達が次々と“偶然”により死亡し、ついには恩師であった先生も“偶然”死亡した・・・

そうして俺は姫凜が死んで以来自宅の自室に引きこもり、みんなが死んだ今でも、自室から抜け出せず、抜け殻のような生活をしている。

しかし、それは全て“偶然”なのだろうか・・・

この疑問に対して二ヶ月振りに頭を回転させてみる。

きっと今の俺ではこの問題は解決できないと思っていた。

しかし、答えは数秒の思考により簡単に求めることができた。

答えが分かったので俺は自室を出てキッチンへと向かい、そこにある包丁を手に腕の動脈を正確に切りつけた。

案外痛みは少なかったが、腕からは大量の鮮血が零れ落ち、それはゆっくりと床の畳みを赤に染めていく。

リストカットでの自殺って案外簡単なんだと思いながら、俺はこの家に住みだしてからずっとキッチンに飾っていた一つの写真建てを手を取った。

写真にはこの家の庭で、今は亡きみんながバーベキューをしているものだった。

写真に写っているみんなの表情は葬式の時に見たような悲しい死に顔とはうって変わって、その時とても幸せだったのだろうという

ことが見ただけで分かるほどに満面の笑みを浮かべていた。

先ほどの疑問の答えは簡単だった。

それは俺だ・・・

全ては俺が姫凜の誘いを断ったことから始まった。

そのせいで姫凜のことを愛していた男友達は、失った悲しみに耐えれなくなつて自殺し、いつも方向音痴が心配で帰りは一緒に下校していたあの年下の女友達も、俺が自宅に引きこもっていたせいで、下校中どこかへと迷い込んでしまったのだろう・・・

先生だってそうだ、他にも“偶然”、いや“俺”によって命を落としていった友人たちだって・・・

「みんな・・・ごめん・・・死んだって罪滅ぼしにならないことぐらい分かっているけど・・・俺・・・もう駄目だよ・・・もう・・・人生やり直すことなんてできないよ・・・やつと・・・やつとできた友達だったのに・・・」

立ち眩みと同時に視界がぼやけていく、もう俺は死ぬだろう・・・今まで大切にしていた写真が畳みに落ち、写真建てごと赤く染められていく。

それと同時に頬に暖かい液体が流れているのが感じられた。

これはきつと涙・・・？

嬉しい・・・この町に来るまで俺は一生涙を流すことはない、いや、涙なんて流しても無意味と思っていたから。

悔しい・・・訳のわからない“偶然”が全部“俺”と繋がっていたことが。

悲しい・・・これはよく分からない。

死んでいった友達の葬式でも俺は涙を流せなかった。

別に涙が枯れたとかそんなことではなく、単純に泣けなかった。よく分からない感情がこみ上げてくる。

これは生きたいという感情なのか、それとも・・・

結局答えは出ないまま、俺の視界は黒色で塗りつぶされていった。

ああ・・・俺の人生って・・・なんだったんだろ・・・

――雛――(1) 出会い

耳に付けているイヤフォンからは今でも好きな歌が流れている。
俺は今日をもつて、この橋合町を出て旅に出る、別にこの町が嫌
いになった訳じゃない、ただ旅に出たいんだ。

俺が生まれ育ったこの島――李郷島りきょうじまは本島と橋一本で繋がっている
沖縄ぐらいの広さを持つ島だ。

んでもって俺が今まで過ごしてきた町がこの橋合町。はしごうちょう

橋合町の名前の由来はなんとなくだが、感じ取ることができるだ
ろ？

本島と「橋」で繋がっている、つまりいつでも「合える」からそ
んな名前なんだとさ。

まあ今から五年前、俺が小学校五年の時に担任だった定年間近で
少しボケかけている先生から聞いた話だから、本当かどうかは曖昧
だけど・・・

にしても変な名前だよな。

「橋と繋がっているからいつでも合える」ってのが町の名前の由
来だなんて。

(俺だったらもっとカッコいい名前を・・・)

そんなことを考えているといきなりイヤフォンから流れていた歌
が止まった。

「えっ！」

急いでポケットに入れていた小型の音楽プレイヤーの画面を確認
する、そこには電池切れを示すマークが画面いっぱいに点滅してい
た。

「・・・オーマイガー・・・」

落胆しながらゆっくりとイヤフォンを耳から外す。

出発前にちゃんと小型の音楽プレイヤーの充電をしておくんだっ
た。

そうして、好きな歌を聴いて偽っていた俺の心は、自然と本来の姿へと戻っていった。

そう・・・本当の俺へ・・・

俺の名前は「八条鮫我」はちじょう・こうが。

鮫に我、ってかいて「コウガ」って読む、ホントにふざけた名前だよな。これじゃあこの島と同じだぜ。

この町を出ようと思ったのは、嫌になったからだ。

成績優秀、スポーツ万能、百年に一人の人材。

そんな優秀な肩書きを小さい頃から持つ俺は周りから天才と呼ばれて今までを過ぎしてきた。

しかし、これを話して、「なんて恵まれてるんだ」という奴らを俺はこれまでに何人も殴ってきた。

恵まれてる！？冗談じゃない！

俺はその才能のせいで周りから拒絶され、嫉まれてきた。

俺の言葉を聞いてくれるのは生まれつき体の弱い母さんと、一般会社員である父さんだけ・・・学校の先生にいたってはただ俺の成績を伸ばしたいだけだ・・・

友達なんていない・・・別に悲しい訳ではない・・・いやっ、もしかしたら悲しいのかもしれない・・・今の人生に意味はあるのだろうか・・・それを確かめに俺は旅に出るのだろう・・・

遠くからバス独特の排気音が聞こえてきた。

（やっときたか・・・）

イラつきを隠しつつ腕時計に目をやると時計の針はもう夕方の方の五時半をさしている。

俺は荷物を手に目の前に停車したバスに乗り込み、バスの奥の窓際席を陣取った。

バスは随分昔から使用しているようで、座席の所々には錆が目立ち、長く使っているのが匂いでわかるほどに中にはどこか懐かしさを感じさせる説明しにくい匂いが充満していた。

（あっ・・・そういや・・・）

床に下ろした荷物から長年使用している皮製の財布を取り出し、身を確認する。

(・・・オーマイガー・・・)

財布の中には千円札が三枚と五百円玉が一枚、そして一円玉が四枚、計3504円が入っていた。

(どうしよう・・・銀行から金を下ろすの忘れてた・・・)

腕を胸の前で組み少し考えた結果、俺はゆっくりと運転手さんの下へと歩を進めることにした。

運の良いことにバスはまだ出発していない。

運転手さんの斜め後ろまで来てたところで、俺は足を止め緊張しつつも運転手さんにか細い声で話しかけた。

「あのーすみません・・・」

手を擦りながら運転手さんを見つめる。

「はい?・・・」

振り向いた運転手さんは五十歳位の年配者で、年季の入った制服を身に着けていた。

「あのですねえ・・・実は私、旅に出たくてこのバスに乗ったんですが、お金があんまり無くて・・・五百円でどれくらいまで進めますか?」

この質問に対して運転手さんは先ほど俺が座席でしたように腕を胸の前で組んだ。

「えーと・・・五百円だと・・・悠藻村ぐらいまでならいけるよ。」

「あの、勝手なわがままなんです、そこまでいったらバスを止めてもらえないでしょうか?」

「ええいいですよ。どうせあなたしかお客さんいませんからね。ハハハハ、」

「じゃあよろしくお願いします!」

運転手さんがいい人でホントによかった。

間も無く俺がもう一度席につくとバスはゆっくりと出発するのだった。

バスは深い森に挟まれた獣道を独特な排気音とともに進んでいた。今進んでいる獣道はこのバス以外にはあまり使われていないのだろう。道の至る所には小石や雑草、深い溝などが多く目立っていた。そのせいでバスの中には激しい振動が頻繁に起こっており、俺は乗り物に強かったから助かったが、乗り物に弱い人なら数時間としないうちに嘔吐するのは確実だろう。

しかしそれ以上に、俺は窓際の席を陣取っていたおかげで所々から夕日が差し込んでいる美しい森を十分に眺めることができ、激しい振動など忘れることができるほどの輝かしい光景に心奪われていた。

俺は今まで過ごしてきた十七年間の人生経験でもこんなに素晴らしい光景は見たことがない。目の前には美しい花々や不規則に並んだ樹齢三十年は超えているであろう立派な木々。その木々の隙間からは時折鹿や猪などといった野生の動物を確認することができ、人の手が一切加わっていない清らかな場所だということが容易に想像することができる。更に耳を済ませると心安らぐ自然独特な音色や鳥達の囀りも聞き取ることができる。おそらく橋合町で一生を過ごしていたら俺はこの光景を見ることができなかったことだろう。唯一つバスの排気音だけが余計だが、それでも目の前に広がる森はどんな人々の心でも救うことができるだろう程の見えない力を持っている。こんなに美しい森なら世界遺産になってもいいと思うのは俺だけだろうか・・・

（そういや “ゆうもそんな” ってどこだろう？）

窓辺に片肘を付き外の景色を楽しみながらも俺は “ゆうもそんな” についてからどうするかを考えることにした。

出発前、旅をするのに必要であろう知識は全て “記憶した” が、この島の地図を見ていなかったのは今思うと失敗だったのかもしれない。

足元においてある荷物の中から一冊の通帳を取り出す。

この十七年間、俺は様々な大会で賞状を取っているから銀行には大会の優勝賞金が少なからず入っていると思うけど・・・俺って金に興味なかったからなあ・・・

ドクッドクッドクッ

しかし、いざ通帳を目の前にとすると胸が苦しくなってくる。この通帳は俺が始めて何かの大会で優勝し賞金を貰った時に父さんが作ってくれた口座に繋がっている。その後俺は様々な大会に優勝をしており、賞金は全部その口座に送られているはずだが、肝心の俺は金には興味がないからこの通帳はもう十数年間開けていない。

（もし通帳に十万円くらいしか入ってなかったら、遠くに行っても一ヶ月もしないうちに帰らなくちゃな・・・）

震える手でゆっくりと通帳を開く。すると中には二百七十万円もの現金が入っていると書かれていた。

「よかった・・・って！まさかの三桁！」

先ほどまで不安に覆われていた俺の心は、通帳を見ても安堵することはできなかった。

まさか三桁もの大金が入っているなんて思ってもなかった・・・

（三桁・・・三桁・・・三桁・・・）

頭の中で虹色の妄想が発生する。

三桁もの大金があれば家族で遠くへ旅行に行けるし、珍味と呼ぶに相応しいような美味しい食べ物も沢山食うことができる。さらには携帯ゲームから大型のゲームまで様々なゲームを幅広く集めることができるだろう。

ドン！

瞬間、大きな溝を通過したのか、バスが大きく揺れる。

「あっ！俺の夢！」

そして大きな揺れとともに俺の手から通帳が零れ落ちた。通帳は座席の隙間を滑っていく。

「行かせるかああああ！」

ひたすらに通帳を追いかけるが、通帳は生意気にも螺旋を描くように滑っており、中々キャッチすることができない。

「痛っ！・・・この！・・・ここだ！・・・畜生！・・・おりややややや！」

数秒間の死闘の末、俺は途中揺れにつられて数回頭を打ったが、最後にはヘッドスライディングの形でなんとか通帳を手に入れることができた。

「ははは！俺から逃げられるとも思ったか！たかが紙切れの分際で！っははは！」

「なにをしているんだ！危ないから早く座席に座りなさい！」

「あっ・・・すみません・・・」

夢中になっていて気づかなかったが、俺はバスの一番後ろから運転手さんの真後ろまで通帳を追いかけていたらしい。そのせいで運転手さんに怒られるはめになったのだが・・・

（・・・ん？）

席に戻ろうとした俺はその場に何かの違和感を感じ、近くにいる運転手さんの背中を注意深く観察した。

（・・・あれ？・・・運転手さん・・・震えてる？）

口では強く叱られたが、運転手さんをよく見ると肩から腕までかけて少し震えている。まさか俺にビビっているわけでもないだろうし、どうしたのだろうか？・・・

「早く座りなさい！」

「うわっ」

咄嗟に突き出された手によって俺は少しバランスを崩し、床に尻餅をついた。

俺がその場に立っているのが気に食わなかったのか、運転手さんはその言葉と同時に片手で俺の体を強く押してきたのだ。

しかしその時、運転手さんがかなり必死そうな表情をしているというのを、一瞬だが確かに確認することができた。激しい振動のせいで分からなかったが、バスのスピードも出発当初と比べると少

し上がっている気がする。

「あの・・・どうかしたんですか？」

ゆっくりと立ち上がりもう一度運転手さんの背後に立つ。

「いいから座ってなさい！」

もう一度突き出された片手を俺は両手で受け止め、包み込むように強く握り締めながら、運転手さんに勢いよく問い詰めた。

「運転手さんが答えてくれるまで戻りません！お願いです！教えてください！」

俺は一度気になることがあればとことん調べつくす性格なので、運転手さんがなぜこんなにも肩を震わせているのか知りたくて仕方なかった。

運転手さんは一瞬面食らったような表情をしたが、すぐに陰しい表情に切り替える。

「なにも隠し事なんてない！」

「運転手さん！僕は何があったのかを聞いたんです！隠し事なんていってないですよ」

「あっ・・・」

運転手さんはまた面食らったような表情を浮かべたが、すぐに前の道を見つめなおした。しかし、硝子越しに道を見ている運転手さんは、何かを考え込んでいるかのような難しい表情をしている。

おそらく自分の発言の失態に後悔しつつ、俺に何を話すのかを考えているのだろう。

実際そうでなくては、話を聞くまでに、目的地である“ゆうもそん”に到着してしまう。そうなれば俺はこの先一生この謎の真相を知ることができないだろう。

そうして数分後バスはゆっくりと脇道に停車した。

別にこんな獣道なんてだれも通らないので脇道でなくても良いと思うのだが。停車した後、運転手さんは俺のほうに向き直った。その顔は、よく見ると目元が赤くなっており、涙を流した後がはつきりと残っている。

「・・・悪いね怒鳴ったりして・・・実は・・・」

運転手さんは俺にゆっくりと、しかし確実に今起こっている事実を教えてくれた・・・

運転手さんの話ではバスが森に入ってから数分後、無線で運転手さんの娘さんが謎の村“ゆうもそん”から橋合町に遊びに行っている時に交通事故にあったと通信が入って、今出している便が終わったらずに病院へ向かうように言われたようだが、目的地であるその“ゆうもそん”まではまだ数時間かかるようで困っていたらしい。涙の後は、おそらく仕事を優先して娘の所へ行くことができない自分に腹が立ったからなのだろう。

どうしようもない、どこにもぶつけることができない腹立ち程、悲しくてつらいものはないのだから。

「・・・君・・・悪いがもう一度橋合町まで一緒に帰ってくれないか？明日必ず“ゆうもそん”に連れて行くから・・・もちろん御代は結構！だからお願いだ！」

運転手さんは必死に頼んでくるが、俺にはその願いを聞くきはない。なぜならもっと簡単な方法があるからだ。

「お断りします」

「そんなこと言わずにお願いだよ！・・・」

「何度頼まれても、駄目なものは駄目としかいいようがありません。お断りします」

「そんな・・・」

俺のきっぱりとした返事で絶望したのか、運転手さんはとうとう瞳に溜めていた涙を流し始めた。

そこで俺は初めて自分がきっぱりと話をしすぎたことが失敗だということに気が付いた。

「えっ！あっ！なっ泣かないでくださいよ！もっと簡単な方法があるでしょ！」

「えっ・・・」

俺は早足で先ほどまで座っていた座席から荷物を取り、それを手

に運転手さんの目の前に立つ。

運転手さんは俺が荷物を取りに言っている数秒間で “ 簡単な方法 ” というのに希望を持ったのか、ついさっきまで流れていた涙は止まっており、よく分からないような表情をしている。

「簡単ですよ。俺を置いて橋合町に帰ればいいんですよ」

「えっ・・・それはどういう意味だい？・・・」

運転手さんは俺の提案の意味がよく分からないらしく、驚きの表情を浮かべつつも俺の顔を覗きこんでくる。

「そのままの意味ですよ。僕を置いて先に橋合町に向かってください」

運転手さんは一瞬喜びの表情を浮かべたがそれは本当に一瞬のことで、すぐ、今にも泣き出しそうな表情へと戻った

「有難いが・・・こんなところに君を置いていくなんてできない・・・」

先ほどもで止まっていた涙がまた流れ始める。

（まったくこの人はどれだけ泣き虫なんだよ）

言葉は悪いかもしれないが、おじさんの涙なんて俺は見たくない。というか男泣きというものはあまり見えたものではないと俺は思う。「安心してください！僕は今日から旅に出る者、食糧もテントもちやんと持っています。大丈夫ですよ」

出来るだけ優しく話しかけ、俺はゆっくりと荷物を持っていないほうの手を運転手さんの肩にのせる。

「ホントにいいんだね・・・ホントに・・・」

そうして俺は運転手さんの肩をさすりながら優しくかたりかけた。

「大丈夫ですよ・・・」

運転手さんは俺の手に向かってひたすらに泣き続けているが、正直言って・・・

（気持ち悪い・・・）

「分かった・・・それじゃあ・・・ここから少し先に行ったところに・・・もう使っていない小さなガソリンスタンドがあるから・・・

・明日の明朝、そこで待っていてくれたら・・・必ず迎えに行くよ・・・」

「分かりました。それじゃあそこで待ってます・・・娘さんに宜しく言うておいてください。」

俺は運転手さんの肩から手を放し、ズボンのポケットに入れておいたハンカチを運転手さんに渡した後、ゆっくりとバスを降りた。

背後で「ぶしゅっ」という少し下品な音が連射されたが気にはしない。

「・・・ハンカチありがとう・・・」

バスを降りてすぐのところでは運転手さんに声を掛けられたので振り返ってみると、そこには涙を鼻水でぐちゃぐちゃになったハンカチを俺に向かって差し出してくる、こちらも涙と鼻水で大変なことになっている運転手さんがいた。

（普通こんな状態のハンカチ返すかああ・・・もしかしてこの人あんまり頭良くないのか?・・・）

「いっ、いいですよ!そのハンカチは運転手さんにあげますから!」

俺はハンカチに触れないように差し出してきた手を慌てて押し返した。

（あっそうだ）

「運転手さん、代わりとってはなんです。この島の地図とかってありますか?あったらもらえませんか?」

「あっそれならあるよ。」

運転手さんもやっと落ち着いてきたようで、運転席の前引き出しから一冊の本を取り出した。

「これでいいかな。」

運転手さんが差し出してきた本を受け取り表紙に目をやると、「李郷島マップ」とかかれてあった。

「助かります!ありがとうございます。それじゃあ!」

俺は貰った本を荷物にしまい、運転手さんに手を振りながらその場を後にした。

「いいかい！明日の明朝必ず迎えに行くから！ガソリンスタンドで待っているんだよ！」

運転手さんが窓から身を乗り出して叫んでいるが、俺はそれに応えずにただ手を振り返した。

そして背後に聞こえる独特な排気音とともに俺は一人になった。

周りが確認できないほどの深い暗闇に包まれた獣道を鮫我はひたすらに歩いていった。その手には懐中電灯が握られており、彼はただ頼りない光をあてに進んでいる。

「どこが少し行っただよ！ふざけんなあああああ！」

誰もいない獣道に俺の声がこだまする。

バスを降りてもう数時間が経つが未だにガソリンスタンドらしきものは見当たらない。

それに、夕方に見せたあの美しく心奪われるような森も今となっては不気味な姿へと変貌していた。森から漂う肌寒い空気は俺の心を不安と恐怖に染め上げ、森の奥から発せられる様々な動物の鳴き声でさえ今となっては不気味に思える。

俺は肩に背負っていた荷物から、バスを降りる時に運転手さんから貰った本を取り出し、そこに明かりを向け内容を確認した。

「……やっぱりもう潰れたガソリンスタンドの場所なんて書いてないよな……」

本には島全体の見取り図や細かいデータが載っていたが、どうやらこの他にも“ゆうもそん”という所に行く道はあるみたいで、あまり使われていない獣道の情報など、どこを見ても記されていないかった。

「やっぱりあの運転手さんは馬鹿だ！」

仕方がないので俺は本を荷物に戻し、ガソリンスタンドが見つかるまで愚痴りながらも、ひたすらに歩を進めることにした。

その結果、俺の前方を照らしていた懐中電灯の光は、それからさ

らに数時間後ようやく人工的に造られたボロボロの建築物を捕らえることができた。

今照らしている建物こそ、運転手さんがいつていたガソリンスタンドなのだろう。

所々に穴が開いていてひびの入った塀に、洗車する時に使っていたのであろう機械も錆だらけになったまま放置されている。塀に沿って光を当てると、事務所らしきものを照らし出せたが、それほどこか怖いような雰囲気を漂わせていたので、あまり深く観察しないでおう。

「やっとなつた」

ガソリンスタンドの敷地内に入ってすぐのところで俺は荷物を下ろし、少し休むことにした。

地面は所々に雑草が生えており本当のところはあまり座りたくないのだが、歩き疲れた足を休ませるため、仕方なく座ることにした。「はあああ、今日は疲れたなあああ：おっ！　そういやお楽しみがあるのを忘れてた！」

旅についての本に書いている通りなら、まずテントを張る場所を見つけたら、夜の場合焚き火を起こさなくてはいけないらしいが、そんなことよりも今はこれまでの小学校からずっと待ちに待った“お楽しみ”を味わうことにしよう。

そうして俺は荷物の中から一本の“お楽しみ”——“缶ビール”を取り出した。

キンキンに冷えたビールは一番美味いと聞かすが、そんなことなど気にせずに荷物の中に入れていた缶ビールは生ぬるい水滴をその身に纏わせ、神々しい輝きを放っているように俺には見える。

「やっぱり疲れた時に飲むビールって上手いのかな・・・」

ビール、それは大人の嗜みにして一日の疲れを洗い流す魔法にも似た液体。これを飲むためには最低でも二十年の生を全うしなければならぬ。しかし、俺は“ビールを飲みたい”という欲望をこれ以上抑えることなどできない。俺が旅をする目的の一つはこれであ

る。

緊張した手つきで俺は缶ビールのプルタブに爪を引っ掛け、ゆっくりとそれを引く。

プシュッ！

缶ビールから、今までの十七年間待ちに待った音が発せられる。

しかし、同時に大量の泡（？）が缶から溢れ出してきた。

「しまった！ビールにも炭酸が入ってるから慎重に扱わなきゃいけないだった！どうしようこのままだとビールの中身全部無くなるんじゃないのか！？」

ビールはこの一本しか持ってきていないのでこのビールが飲めなければ今回の旅の目的を一つ失ってしまうことになってしまう。俺は焦りつつも必死に頭を回転された。

「どうすればいい！もう缶に残っているビール全部一気飲みするか！でも一気飲みをすると死ぬとかいう噂を聞いたことがあるし！・・・じゃあこの溢れ出ている泡らしきものごとゆっくりと飲んでみるか！でもこんな形でこれまで我慢してきた欲望を達成したくない！・・・じゃあどうすりゃいいんだよ！」

俺が一人で叫んで、突っ込んでいる時にもビールは確実に減ってきている。

どうすれば！どうすれば！

「大丈夫、泡が止まっても中の飲み物は半分残りますよ」

「えっ！そうなの！よかったああああ！」

突如後ろから優しく掛けられた声によって俺はようやく安堵の息をつくことができた。

「まったく駄目だと思ったよ・・・これまでの望みが一瞬にしてなくなるかと思った・・・」

「全く、お酒は二十歳からでないと駄目なんですよ」

「ハハハ！そう硬いこというなよ！ハハハハハハハハハハ・・・」

「・・・」

に立ち、視線を向けている。顔は肩口まで伸びた長く艶やかな黒髪によって隠れているが吊り上げられた口元だけはハッキリと確認することができた。

「うふふ・・・あっ！ははははははは！」

突然俺を見下ろしている女の子がいきなり大声で笑い出す。やっぱりこの子は幽霊で、今から俺を・・・俺を・・・

薄れていたはずの恐怖が今度は大きな津波のように俺の全身を一気に飲み込んだ。

「ぎっ！ぎやあああああああああああああ！！！！！！」

静寂に包まれた森には俺の裏声混じりの絶叫と女の子の笑い声がただただ響き続けた。

数時間後

パチッパチッパチッ

静寂に包まれた森にひっそりと造られているガソリンスタンドから発せられる焚き火の心地よい音が木霊する。

俺は恥ずかしくて顔を上げることができなかった。

先程まで俺は幽霊と対峙しているという恐怖に包まれていたのだが、その幽霊は実はただの女の子だということを数分前本人直々に報告されたのである。

それからというものの、俺はとりあえず焚き火を起こし、テントを張ったのだが。その一連の作業の最中は一度も女の子の顔を見ていない。

どうせずっと笑っているのだろう。俺は今なら自殺をしてもいいとさえ思っていた。

「あ・・・あのー」

（きた！）

俺は下を向いたまま、女の子が今からいうであろう罵倒に備えた。

「ビール・・・残念でしたね・・・」

（そこから来たか！）

下を向いたまま声は出さずにただ黙って首を縦に振る。

「えっと・・・すみませんでした!」

「えっ?」

俺は女の子が何を言っているのか分からなかったもので、視線を目の前にいる少女へと向けた。視線の先では俺に向かってお辞儀といえよいいのか、上半身をほぼ九十度の角度に曲げている姿が確認できた。

「あの・・・なんで謝るの?」

俺はやっぱ女の子がなんで謝るのか分からずに聞いてみることにした。

急いで顔を上げる少女だが、その顔には不安の表情が浮かべられている。

「えっ!・・・いや・・・それは・・・だって・・・えっと・・・あの・・・私が」

両手を使い、必死にジイスチャーを行っている女の子だが、正直その真意は全く掴めない。しかもなんだか段々エスカレートしているような・・・

「そのっ! だからっ! えっと! なんでだっけ! えっと! えっと! だから!」

女の子の顔が段々と赤へと変わっていく。そしてそれに比例するかの様に少女が行っているジイスチャーのスピードも上がっているのがハッキリと分かる。

（これってヤバイんじゃないか!? よく分からないけど過呼吸になったりとか）

「とりあえず落ち着こうぜ。深呼吸すれば多少は落ち着けるから」

「はい・・・すうううう・・・」

グウウウウウウ!

「あっ」

「うっ」

俺と女の子を取り巻く周囲が瞬間、凍りついた気がした。

「うっうえええん」

(なんで泣くの?!)

目の前にいる女の子がなんで泣いているのか俺には分からなくて、幽霊の時とは違った感じで頭が混乱する。

「えっと・・えっと・・そうだ! 腹っ! 腹減っているんだろ! なっ! ちょっと待ってな!」

急いで荷物の中から旅に出る前に俺が焼いたクロワッサンが数個入っているスーパリーの袋を取り出す。そしてその中に入っているクロワッサンを一つ取り出し、女の子へと差し出した。

「ほらっ食いな。」

「あっありがとうございます・・・」

女の子は俺が差し出したパンを手にとると、躊躇う事無く「パクッ」と一口頬張る。

「お・・おいしい・・おいしいですこのパン!」

一口パンを頬張った女の子は、瞬間にして満面の笑みと呼べる程の表情を俺に対して浮かべ、無我夢中でパンを食べ始めた。

なんだろうか、こんなに喜んでもらえるとは思ってなかった。この心に湧き上がってくる感情はとても暖かくて、嬉しいもの。料理人の人達はこの暖かい感情を求めて、お客さんに料理を作っているのかもしれない。

「あ・・あの・・」

「へっ? な、何?」

気が付くと、女の子はパンを食べ終わったらしいが、まだ物欲しそうな目を俺に向けている。こんな可愛らしい目を向けられて答えることができない男なんているのだろうか。

俺は、なんだか変な気持ちになる前に急いでパンの入っているスーパリーの袋を女の子へと差し出した。この変な気持ちに揺れ動かされたりなんかしたら俺は確実に“ロリコン”、そう幼女好きの変質者への道を突っ走ってしまう。それだけは避けなければ・・・

「ほらっパンならまだあるから好きなだけ食べな」

「でも貴方様の大切な食べ物なんだし・・・」

（いくら俺の名前が分からないからといって“貴方様”って・・・やばい俺・・・もたないかも・・・）

俺は心に右ストレートのパンチをくらったかのような錯覚に捕らわれながらも、よろよろと荷物から幾つかのインスタントラーメンを取り出した。

「安心しなよパンは趣味で焼いただけだから、旅用の食糧なら他にも持ってる」

俺は水を入れた2?のペットボトルを取り出し、荷物から取り出したやかんにその中身を入れた。女の子はただ黙々と満面の笑みを浮かべパンを頬張っている。

（このままこの子に“貴方様”なんて言われたら・・・駄目だ！理性を保て俺！）

頭の中で構成されたイメージの女の子が俺に対して、満面の笑みで“貴方様”と甘く語りかけてくる。これは“ロリコン”への覚醒の兆しなのだろうか。何はともあれこのままでは確実にマズイ・・・

「あのさ・・・」

「ふあい」

女の子は完全に油断していたのか、パンを頬張っている状態で不思議そうな表情で俺へと向き直る。

チェック！

頭の中でチェスの決着の前兆を告げるコールが発せられる。と同時に俺の精神に鋭い数十の刃が一気に突き刺さる。さっきとは違って今度は錯覚なんかじゃない。胸が詰まったように苦しくて、心臓の鼓動が激しくなっているのがハッキリと感じ取れる。

（「ふあい」って！「ふあい」って！「ふあい」ってなんだよ！駄目だ！駄目だ！全然つ駄目だ！落ち着け俺！理性を保て俺！クールになれ俺！まだ今なら理性を保てるはずだろ俺！まだチェックメイトじゃないんだ！チェックならまだ覆せる！理性を保て！理性を保て！）

頭の中で心をイメージし、そこに刺さった刃を一本ずつ抜き取る。一本一本確実に、正確に、理性を保つために。

(とりあえず、お互いの名前を知るところからはじめよう・・・そうすれば多少マシになるかもしれない)

女の子に気付かれないようにゆっくりと数回深呼吸をし、精神を落ち着かせる。まさか俺の精神がこんなにも早く“ロリコン”へと変貌しようとしているなんて・・・もしかして俺には元々その才能があったのだろうか・・・

「どうしたんですか？」

今は女の子の顔を見ることができない。少し失礼ではあるが、俺は女の子の顔を見ないようにゆっくり話しかけた。

「えっと自己紹介まだだったよな・・・俺は八条鮫我。できれば君の名前、教えてもらえたら嬉しいんだけど」

言い終わると同時に横目でチラッと女の子を見してみる。女の子は俺に話をするために急いで残ったパンを口に入れ、飲み込もうとしている。

「うっ・・・ゲホッゲホッゲホッ」

「大丈夫かよ！焦らなくていいから、ほら水」

どうやら急いでパンを食べたせいで喉につつかえたらしい、荷物から500mlの水が入ったペットボトルを取り出して女の子へと差し出す。

「ゲホッゲホッすみ・・・ません」

水を受け取った女の子はペットボトルのキャップを外すと一気に中身を半分程飲み干した。

「大丈夫か？話は落ち着いてからでいいから」

よっぽどパンが喉につかえたのか、俺は未だに咳き込んでいる女の子のもとへと向かい優しく背を擦りながら、ゆっくりと話しかける。

「ゴホッゴホッ！・・・すみ・・・ません・・・ありがとう・・・ございいます」

俺は沸騰したヤカンの中身を一つのインスタントラーメンの中に入れ、三分間、ずっと夜空を眺めながら過ごした。

そうして三分すると鈴も先程の俺と同じように理性を戻せたのか、真っ赤にしていた頬を元の薄白い色へと戻し、マジマジと俺の顔を見つめ始めた。

なぜだろうか、鈴という名前が分かったただけなのに先程までの胸が締め付けられるような苦しみは消え、俺は平常心を保てるようになっていた。

もしかして、この数分間のやりとりで、俺は信じられないくらいの経験地を手に入れたのだろうか。

「鈴もラーメン食べるか？パンだけじゃ足りないだろ？」

鈴はまだ俺に呼び捨てにされるのに抵抗があるのか、名前を呼んだだけで頬を少し赤色に染めるが、混乱しているようではなかった。

「いえ、もうお腹いっぱいなんで・・・」

グウウウウウウウ！

「はううう」

鈴の腹から音が発せられたと同時に鈴の口から出た言葉に少し眉が反応したが、俺は本当にこの数分間でかなりの成長を遂げたらしい。自分でも信じられないくらいに心臓の鼓動が落ち着いていた。

「無理すんなよ。まだインスタントラーメンならたくさん残ってるし、どれがいい？色々あるけど」

俺は荷物の中から持ってきているインスタントラーメンを全て取り出した。

「じゃあこれで」

鈴はインスタントラーメンの王道である「麺の天才」を指差す。

「はいはい」

俺はその蓋を開け、中身の粉末と液体スープを取り出し、かやくを中に入れると、もう一度ヤカンの中身をそれに注ぎ、蓋を閉め、鈴へと渡した。

「三分な」

俺はそれを言い終わると、二つの割り箸を荷物から出し、一つを鈴に渡した後、残った箸で先程作ったラーメンに手を付けた。

箸で掴んだ麺を一気に啜る。

「ズルズルズル」という音とともに、口の中にラーメン特有のうま味が広まり、胃を喜ばせる。そのラーメンを食べている時だけは先程までの出来事を全て忘れることができ、五分としないうちに、カップの中身はスープもろとも俺の胃の中へと納まった。

鈴を見てみると、先程渡したラーメンも三分経ったらしく、鈴も勢いよくラーメンを啜っている。

なんだか鈴を見ていると心が晴れやかになっている自分がいる。もしかしたら俺はもう“ロリコン”なのかもしれない、けどこんなに心が晴れやかになるのなら別に俺は“ロリコン”でも良いのではないかと少し考えてしまう。

俺の視線に気づいたのか鈴は少し頬を赤めて、先程までしていた「ズルズルズル」という激しい音を少し小さくする。そんな行動でさえ、少し愛らしく感じてしまう。どうやら俺はもう言い訳の仕様がないうだ・・・

(あつ、そういえば)

鈴を見ていると俺の脳裏に一つの疑問が横切った。

「そういえばさ、鈴ってどうしてこんな所にいるんだ？ハハまさかキャンプって訳じゃないだろ？」

少し冗談を含めていったつもりだが、瞬間にして鈴の体が今にもラーメンの麺を口の中に入れようとしている所で停止する。

なんだがよく見ると、大量の冷や汗を顔に浮かべている。

「鈴？どうかしたか？・・・なにかいたのか？」

俺は真横に置いておいた、先ほど壊れた懐中電灯よりは小型の新しい懐中電灯の電源を入れ焚き火の周りに光を当てていった。しかし、どこか以上があるわけでもなく、光はガソリンスタンドの外壁と森の木々以外、特に目立ったものは照らし出さなかった。

「どうしたんだよ鈴・・・まさかどこか痛いのか？」

俺は懐中電灯の電源を消し、鈴の真横まで歩み寄り、地面に膝をついた。すると鈴は固まった体を動かし、箸で掴んでいる麺をカッブへと戻し、それをゆっくりと地面に置いた。

「えっと・・・」

鈴が何かを決めたかのように、素早く俺の顔に目線を向ける。鈴は何か言いたいようで少し泣きそうな表情を浮かべていた。

（もしかしてマズイことを聞いてしまったのだろうか・・・最近では家出とかって増えてるし・・・あっても俺も一応家出してるんだっただ）

「その・・・悪かった！言いたくなかったら・・・」

「絶対対に笑いませんか！」

「あ、ああ」

「言わなくてもいい」と言おうとしたのだが、鈴があまりに気迫を込めて問い詰めてくるので思わず相槌を打ってしまった。

（どうすればよいのだろうか・・・俺も家出のようなものをしているから助言をしても役に立てそうにはないだろうし・・・）

しかし、相槌を打った以上話を聞かない訳にもいけないと思い、

俺も決心して鈴の真剣な眼差しへと視線を向けた。

（さあこい！なんだろうと受け止めてやる）

鈴がゆっくりと口を開こうとしている。俺は自分の耳を意識し、そこに入った情報を高速で脳へと持っていけるように集中する。

「私・・・重度の方向音痴なんです」

「・・・へ？」

鈴がずっと真剣な顔をしているのに対し、俺は瞬間表情を崩しかけたが、なんとか持ち堪えた。

「えっと・・・方向音痴なの？」

「はい」

「それも重度の？」

「はい」

「えっと・・・鈴は何処に住んでるんだ？」

「悠藻村です」

三つ程質問した後、俺は震えようとしている手を抑え、荷物から運転手さんにもらった地図を取り出した。

「悪いんだけどさ・・このガソリンスタンドってこの地図でいうとどこぐらい分かる」

地図を開き、鈴が見えやすいように地面に置き、懐中電灯で照らす。

「えっと・・ここくらいだと思います」

鈴は“悠藻村”と書かれた村から数十キロ離れた森を指差した。場所は多分あっていると思う。運転手さんもまだバスで進んでも時間はするといっていたし・・しかし・・

急いで口元に両手を持っていき、溢れようとしている笑いを抑え、もう一度体内へと飲み込む。

地図は読めるのに重度の方向音痴って、それに数十キロも迷うなんて、この子一体何者だ!?

しかし、約束なので俺は最初こそ口を両手で抑えたが、それ以降は笑いを耐えているのがばれない様に必死に堪えた。俺の中で起こっている見えない数秒の死闘が数時間にすら感じたのはこれが初めてだった。

「笑わないんですか?・・ハハッ笑いたかったら笑ってもいいんですよ?」

「え?」

鈴の言葉で一瞬にして、湧き上がってくる笑いが治まる。

よく見てみると鈴は涙目になりながら、何か諦めているかのような表情を一瞬浮かべた後、目に溜めていた少しの涙を拭い数分前まで見せていたものと同じ満面の笑みを浮かべていた。

(この子・・もしかして・・)

瞬時に頭をフル回転させる。すると俺の頭で一つの考えがまとまった。

(この子・・似てる・・)

一か八か鈴の頭に片手を乗せ、鈴の顔を俺の胸へと押し付ける。
もし俺の考えが間違っていた場合、俺は完全な変質者になってしまうが、今はそれよりも優先することがあった。

「きゃっ！」

胸に押し付けた鈴から女の子特有のいい匂いが発せられているが、今の俺にはその誘惑など全く気にならなかった。懷では耳を真っ赤にした鈴が離れようともがいている。

「馬鹿！笑わないって約束しただろ？それにな、人間苦手なことや不得意なことなんていくらでもあるんだぞ？鈴が方向音痴だったのも仕方のないことなんだ・そんなのゆっくり直してったらいいことだろ？・あのさ・・・もしかして辛かったんじゃないか？・こんなんでお前の心を癒せるとは思えないけど・今は俺が受け止めてやるからさ・・・」

「えっ・・・」

俺の懷から離れようとしていた鈴の動きが「ピタッ」と止まる。

「・ハハ・・・なにを・言ってるんですか・・・」

鈴の涙を堪えているのがハッキリと分かる程のくぐもった声が俺の胸から聞こえる。リアクションからして俺の考えは正しかったのだろう。俺は鈴がまだ何か言おうとしているのを無視して語りかける。

「・・・演技をするなら・もっと俺に悟られにくくやってくれないか・・・これは俺の考えでしかないけど・・・お前、今のこの光景を望んでたんじゃないか？」

「望んでたって・・・何をですか・・・それよりも早く離してくださいよ・・・」

止まっていた鈴がまた俺の胸の中でもがきだす。しかし、その抵抗は先程までとは違って全くといっていいほどに力が籠っていない。今度は俺の目頭に少しの涙がたまってきた。昔の記憶が脳裏に蘇っていく・・・

俺は・・・この子を救わなければならない・・・

俺は鈴の頭に置いた手を強め、先程以上に鈴の顔を胸に押し付ける。

「無理するなよ！・・・たぶん俺は分かっているから！全部じゃなくても少しでもお前が辛かったってことくらいは分かっているから！・・・だから・・・今は無理しなくてもいいんだよ・・・ちゃんと受け止めてやるからさ・・・」

ゆっくりと鈴の頭に乗せた手を肩へとうつし、もう片方の手も鈴の肩の上に置き、両手で鈴を胸から引き離す。すると今にも泣き出しそうな顔をした鈴が現れる。鈴のその瞳は明らかに俺に救いを求めている。

右手を鈴の肩からもう一度頭へとすし、今度は優しく頭を撫でてやる。そして、俺は優しく笑顔を見せ、鈴の心に少しでも響くことを祈り、語りかける。

「・・・俺は絶対！・・・笑わないから」

「こう・・・が・・・さん・・・あ・・・ありがとう・・・ごきます・・・うええええん！」

「おっと」

瞬間にして鈴が俺の胸に今度は自分から飛び込んでくる。一瞬それに驚いたが、すぐに俺は両手を鈴へとまわし、ゆっくりと、けど俺の気持ちも少しでもこの子に届くように優しく抱きしめる。もう今は“ロリコン”とかどうでもいい。俺はただこの子を慰めてやれるなら、この子の心に住み着いている闇を少しでも祓うことが出来るならどんなことでもしよう。

これは俺の推理でしかないが、おそらく鈴は自分が方向音痴だということに重度のコンプレックスを持っている。きっとこれまでどんなに大切な人でも、自分が方向音痴だということを話すと大笑いされていたのだろう。・・・多分鈴はそのとき、泣くことも怒ることも出来ずに、ただその大切な人と一緒に、自分の悲しみを、感情を押し殺して大笑いしてきたんだろう。きっと鈴が俺にそのことを話してくれた時、俺も他の奴らと同様に笑っていたら「笑わないでく

ださいよ」なんて鈴自身笑いながらその場を流していたのではないだろうか・・・そして悲しみがまた心に傷を残す・・・

だからこの傷を癒すにはこの瞬間、この時でなくてはいけないんだ。この子の未来の為にも・・・

鈴の暖かい体温がシャツを通じて感じる。俺は鈴の長い黒髪を優しく数回撫で、耳元で小さく言葉を発する。

「・・・辛かったんだな・・・いっぱい泣きな・・・大丈夫だから・・・」

「うええええん」

腕の長さの違いもあり、鈴は俺に対して腰付近まで手をまわして離れないように俺のシャツを掴み、抱きついてくる。そして更に大声を上げて泣き出した。

森から発せられている独特なアカハラの鳴き声がガソリンスタンドを包み込んでいた。

アカハラが飛ぶ島 < 雛12 >

(2) ノイズ

ザアザアザアザア

気が付くと俺はノイズの世界にいた。そこでは右を見ても左を見ても、どこまでも続く砂嵐のようなノイズが広がっており、耳を塞ぎたくなるような雑音がいつまでも脳裏に響いてくる。

(なんだ・・・これ・・・)

咄嗟に俺は自分の声が出ないということに気が付いた。ノイズがひどいせいで単に聞こえないだけかもしれないが、それからいくら叫ぼうが、聞こえるのは俺の声ではなくて、ただノイズから発せられているのであろう雑音のみだった。

(なんだよこれ・・・)

訳が分からない。このままでは頭が狂ってしまう。

俺はどうにかしてこのノイズの世界から抜け出せないかと、それから数時間思いつくままに行動した。とにかくこの世界の果てがなにか、方向もわからずに走り回ったり、誰か助けがこないか叫んでみたり。おかげで体力はもう底をつき、喉もカラカラだ。

ノイズ以外なものも見えない、聞こえる音も雑音のみ。あと数時間でもこんな世界にいたら俺は確実に狂ってしまうだろう。

その時俺は一つの仮説を立てた。

(もしかして・・・ここが地獄という世界だということなのか？だとしたら辛すぎる・・・想像していたよりもひどい・・・こんな世界に居たくない・・・)

膝を抱え、その場に腰を下ろす。

もう走るのも叫ぶのも疲れた。ここが地獄だということのならこの辛さも少なからず納得できる。俺が地獄にいるってことはおそらく、俺はあの子を救えなかったのだろう・・・

(まあ・・・仕方が無いか・・・ごめんな・・・鈴)

脳裏に鈴の笑顔が浮かび上がる。今頃鈴は天国に行ってしまったのだろうか・・・

頬に熱い液体が流れ落ちる。俺は鈴を守れなかった。あんなにも輝いていたあの子を・・・その夢を守れなかった。その罪悪感からか、頬を使って落ちる暖かい液体は中々止まることはなかった。

(泣かないで・・・)

頭の中で誰か幼い女の子のような声が響く。

(えっ！)

俺は必死になって辺りを見渡したが、どこにも女の子の姿なんて見えない。結局俺は狂ってしまったのだろうか・・・

(あなたは狂ってなんてありませんよ・・・けど、あなたはここには来てはいけないんです)

俺の考えていることが読めているのか、女の子のような声は俺の疑問に答えるように頭の中に響いてくる。

(いいんだよ・・・俺は鈴って女の子を守れなかった・・・この世界はその罪を償うために用意されてんだろ？・・・俺は・・・受け入れるよ・・・)

もう何もかもどうでもよかった。鈴を救えなかった。そのことが俺の生きる気力を失わせていく。もしこの地獄から現実の世界に生き返ったとしても、俺はすぐに自害するだろう。

(あなたは勘違いしています。ここは地獄なんかじゃない。そして・・・鈴ちゃんは生きています)

(えっ！)

さっきから驚いてばかりだ。しかし、それよりも俺は嬉しくて涙を止めることができなかった。

(ほんとに・・・ほんとに鈴は生きているのか・・・)

(・・・)

返答が無い。と同時に心に不安の波が押し寄せる。

(お・・・おい・・・おい！どうなんだよ！鈴は・・・鈴は生きてる

のかよ！)

返答がない。まさか・・・さっきのは冗談だったのか・・・
(頼むから・・・頼むから鈴は生きているって言ってくれよ！・・・
さっきのは冗談なんかじゃないって言ってくれよ！)

(鈴は・・・熊本鈴は・・・生きています)

ゆっくり、けどどこか躊躇いのようなものを感じさせるその発言に、俺は不信感よりも安心感を感じていた。やはり目からあふれ出る涙はまだ止まりそうにない。

(・・・そうか・・・よかった・・・ほんとによかった・・・)

鈴が生きている。それだけで俺はもうよかった。安心して・・・
(死ぬなんてためですよ)

また考えを読まれたのか、俺の考えていることよりも早く、女の子が声を響かせる。

(なら・・・ここからはどうやったら出られる・・・まさか閻魔様でもぶっ倒せなんてバカなこと言わないよな)

(もしかして・・・怒ってます？)

(怒ってはない・・・ただお前が何か隠していることぐらいは分かっている)

この女の子の声をしている何者かは絶対に何かを隠している。もしそうでないのなら鈴が生きていることを俺がなんとも聞かなくても教えてくれていたはずだ。

(すみません・・・言えないんです)

(・・・分かった・・・言いたくないなら言わなくてもいい・・・でもここからの出方は教えてくれるんだろ)

(はい)

声の主はどうやら俺を元いた世界に帰したいらしい。こんなに言っているのだから間違いないだろう。

(っでどうすればいい)

(まず目を閉じてください)

俺は言われたとおりに目を閉じる。しかし、目を閉じてても不思議

とノイズは消えない。これは頭の中でもノイズが流れているということなのだろうか。

（なんだよこれ・・・なんで頭の中にまで・・・）

（大丈夫です。焦らないで指示に従ってください）

ゆっくりと深呼吸をし、気分を落ち着かせる。

（ありがとうございます。それでは続けますね。ゆっくりでいいんで集中してください。元いた場所を、最後に貴方がいた場所をイメージしてください・・・）

（最後にいた場所？）

（そうです。最後に貴方がいた場所です）

そういえば、俺ってどうしてここにいるんだろうか。確か俺は鈴と一緒にガソリンスタンドにいて・・・

（そうです集中してください・・・最後にいた場所を・・・）

最後にいた場所は・・・ガソリンスタンドだ。

（違います！貴方が最後にいた場所はガソリンスタンドではありません！もっと集中してください！）

言われた通りに集中力を上げていく。もとより集中力を上げるのは得意分野なので、集中力はすぐにでも上げることができた。頭を回転させる。そうだ俺が最後にいた場所は命がけで鈴を救った場所・・・川だ・・・

（・・・違います・・・違うんです・・・どうすれば・・・）

（ちょっと待てよ・・・違うって・・・帰れないってことなのか・・・ふざけるな、ふざけるな！俺を早くここから出せ！お前なら出せるんだろ！早く出せよ！早く！）

目を開け、どこかかが見ているのだろう女の子に向かって叫ぶ。

（落ち着いてください！どうかかしますから！）

もう駄目なのか・・・俺は一生ここに・・・こんなところになくちやだめなのか・・・

『なら俺の指示に従ってくれないか？』

（えっ）

今度は頭ではなく、心に別の声が響く。その声は男の、それも青年のような声だ。

『俺が元にした世界に帰してやるよ』

（駄目です鮫我さん！そんな声聞かないでください！）

（おいっ・・・なんで俺の名前を知ってるんだよ・・・）

（そっそれは・・・）

『なっ、そいつは何かと危険だと思わないか？俺ならお前を元の世界へ帰すことができる、少し辛い経験をするけどな』

確かに、実際は新しく聞こえるようになった男の声のほうが信頼性には欠けるが、女の子が俺の名前を知っているということはやっぱり気に掛かる。もしかして俺をここへと連れてきたのはこの子なのか？

（わっ、私じゃないです！信じてください！）

心を読まれたのか、女の子は俺が思考をするのと同時に返答してくる。

（ならなんでお前はいつまでも俺の心を読むんだよ・・・）

『俺はお前の思ってることなんて読めないぜ・・・』

（黙ってください！鮫我さん！お願い信じて！）

（じゃあどうすればここから出られるかお前は知ってるのかよ！）

（それは・・・）

『俺は知ってる』

（黙ってください！）

頭が混乱する。今まで頭の中での会話なんてしたことがなかったからか、もう頭の中はパンクしかけている。

（おい男の方・・・俺はお前を信じる・・・俺はどうしてもここを出たいんだ！鈴が生きているのを確認したいんだ！）

『上等だ。何回もいうようだが俺はちゃんとお前を元いた世界に帰してやるぜ』

もう誰が正しいなんて分からない。もしかしたら俺は間違っているのかもしれないが、俺は少しの希望でもあるのなら求めたい。

（その心意気はわかりますが・・・お願いします・・・鮫我さん・・・）

この子はどうしてここまで俺を・・・でもどちらが正しんだよ！（ごめん・・・俺に少しでも希望を与えてくれてありがとう・・・でもやっぱり俺は帰りたい）

『よしじゃあ俺の言った通りにしてくれ。まず前と同じように目を閉じて集中しろ』

言われたとおりに行動する。目を閉じ、前と同じように集中する。『よし集中できたか？それじゃ今度はイメージしろ、でもイメージするのは最後にいた場所じゃなくて・・・お前の身近な人が今何処にいるかをイメージしろ』

（駄目です！やめて！その人の言っていることは全くの嘘です）

（黙ってくれ）

集中力を上げる。俺の身近にいる人・・・その人が今何処にいるのかを考える。

『そうだ！いいぞ！もっと集中しろ！』

（駄目！やめて！）

（黙れよ・・・）

更に集中力を上げる。頭が熱くなっても関係ない。ただただ集中する。

『そうだ！いいぞ！そろそろ見えるんじゃないか？目をゆっくり開けてみる』

（駄目！目を開けては駄目です！）

ゆっくりと閉じていた目を開く、するとそこには薄れかかったノイズがあった。そのノイズの先には何かが見えるけど、ハッキリとは確認できない。

『よしっ行け！』

（えっ、えっ・・・うおおおおお！）

訳が分からない。けど、今は何処にいけばいいのか分かる。ノイズの先へ、どこか分からないノイズの先へただひたすらに走る。不

思議とボロボロだった俺の体はまだ走ることができた。俺は走る。もう一度、もう一度鈴に会う為に・・・

『バカっ走るんじゃない!』

(えっどういことだよ!)

目の前のノイズがまた元の状態を取り戻しつつある。訳がわからない

(もうやめてください! 私が他に方法を考えますから! 絶対に鈴ちゃんに会わせますから!)

(黙れよ! それよりどういことだよこれ!)

『いいか走るんじゃない! 見るんだ! イメージしろ! ノイズの先を!』

足を止め、再び目を閉じてイメージする。イメージするのは父さんの仕事場。その仕事場のオフィス。その外観。そして父さん。

目を開けると、またノイズが薄れている。もうこれが最後のような気がする、このチャンスを見逃したら後がないだろう。

『行くんじゃない、見るんだ』

(お願いです! もうこれ以上鮫我さんに教えないで!)

(頼むから黙ってくれ!)

ノイズの先をイメージする。きっとその先には父さんのオフィスがあつてそこで父さんは働いている。そう勝手に解釈する。

『そうだ! 見るんだ! ノイズの先を!』

もうちょっとのような気がする。後少しできっとノイズの先へと行ける。その世界はきつとここよりはマシな世界。そう、鈴のいる俺の望む世界。

『そうだ! もうちょっとだ!』

(やめて! やめて! やめて!)

『聞くな! こいつの声なんて聞いても無駄だ! 今は集中しろ! ノイズの先を!』

(お願いやめて!)

集中する。ノイズの先にある光景を・・・

（やめて！）

頭が熱い、でもイメージを止めない。俺の世界に帰るんだ。

（鮫我さん！）

（黙れっていつてんだよ！）

瞬間、頭が割れそうな痛みとともに、俺の視界は光に包まれた。

この先にはきつと俺の望んだ世界があると信じて俺はその光に全てを委ねた。ただ引っかかるのは男が言っていた「少し辛い経験をするけど」という言葉だ。それは一体何を意味していたのか、俺はこの時、身をもってそれを体験するということがどれだけ辛いものか、想像することができなかった。

アカハラが飛ぶ島 < 雛13 >

(3) 病院

暗く、静まりかえった白の一室に鮫我と鈴はいた。その一室から聞こえるのは彼の心拍数を測定するための装置が正常に動いていると、窓際のベッドで横になっている彼を覆いかぶさるようにして寝ている鈴の静かな寝息だけだ。

「ん・ん・ん・ん・ん・ん」

鈴がゆっくりと目を開ける。

「いけない・・・寝ちゃってたんだ・・・」

鈴はベッドから身をあげると、窓に掛かっているカーテンを開けに窓際へと歩を進めた。

カーテンは「サー」という静かな音と共にゆっくりと開かれる。窓の外には緑豊かな森が展開されており、その森からは小鳥の囀りが無数に鳴り響いている。

「おはようございます。鮫我さん・・・今日もいい天気ですよ」

鮫我に向かって明るく話しかける鈴だが、その表情はどこか曇っていた。八条鮫我はある出来事がきっかけで、三日も前からこの病室で死んだかのように眠っている。実際彼が意識を取り戻す可能性は低いもので、この病院に彼が運ばれたときの容態は絶望的なものだった。片腕の骨と肋骨数本は折れており、その折れた肋骨は肺に刺さり、呼吸もできない様子だった。

鈴は鮫我がこのような状態になったのが、自分のせいだという罪悪感に捕らわれ、三日間ずっと病室にこもりきりだった。彼女自身三日前にここに運ばれたとき、高熱を出しており、危険な状態だった。実際なら彼女も今は安静にしとかなければいけないのだが、どうしてもということで熱が下がった今は担当医の許可を得て、ずっと鮫我につきっきりとなっている。

(・ ・ ・ ・ ・ やめてくれ ・ ・ やめてくれ ・ ・ ・ ・ ・)

今度は真っ暗な世界が広がっている。もう耐えられない。もう元の世界に帰りたい。

「やめろ！」

感情のままに俺はベットから勢いよく起き上がる。と同時に世界に色が帰ってくる。

「もうたくさんだ！ やめてくれよ！ ああああああ！」

しかし、俺にはそれよりも、頭を抑え内に溜まった恐怖を声へと変換することしかできなかった。動かない右手が更に恐怖を増大させていく。もうたくさんだった。誰かが殺されるのを何もできずにただ見つめるだけなんて・・・

「鮫・・我さん・・」

誰かが何かを言っている気がするが、そんなことを気にする余裕なんてなかった。ただ今の俺にできることは、叫ぶことだけ……

「うああああああああああああああ」

[illegible]

頭の中が恐怖で埋め尽くされる。もう今の俺には「怖い」という感情以外必要なかった。どうやら俺は完全に狂ってしまったらしい。

「鮫我さん！」

瞬間、頭を抑えていた左手に今まで感じる事ができなかった暖かくて優しいような温もりを感じた。すると、ゆっくりとだが、確実に視界が広がっていく。数分後、俺の世界に色が帰ってきた。目の前には俺が望んだ世界があって、そこには鈴がいる。

「鈴・・・鈴！」

涙が止まらなかった。嬉しくて、ただ嬉しくてたまらなかった。どんなに格好が悪くても、今はただ泣き崩れることしかできないよ
うだ。

「鮫我さん！よかった！よかった！」

鈴が俺の首に抱きついてくる。暖かい、この温もりこそ俺の望んだ世界だ。

俺はやっと・・・元の世界に帰れたんだ・・・

安心と同時に全身を無数の針で刺されたかのような痛みが脳裏を横切る。

「なん・・・だ・・・これ・・・あああああああ！」

体中が熱い。まるで火あぶりにされているかのような味わったことの無いその痛みは、耐えるには辛すぎるもので、いくら格好が悪いと分かっていても目から溢れ出る涙を止めることはできない。

「鮫我さん！×××××をつれ×きます×××！」

鈴が何かを言っている。どうやら状況から判断すると、医者を呼んできてくれるようだ。しかし・・・

俺は痛みも気にせず、離れようとする鈴の片手を動く左腕で掴む。

「えっ・・・鮫我さん？」

鈴が驚いた表情で俺に向き直る。正直な話俺も驚いている。こんなにも体中が痛いのに、思った通りに体が動いてくれるなんて・・・

痛みを耐え、ゆっくりと口を開く。

「ま・・・待ってくれ・・・鈴・・・」

ただ、今は一緒にいて欲しかった。鈴が隣にいる。鈴のいる世界をもっと過ごしたかった。そう思っているだけで、少しだけ不思議と痛みは和らいでいる気がした・・・

「鮫我さん！離してください！」

鈴は掴まれた手を離そうとするが、不思議と鈴と一緒にいたいと思えば思うほどに、痛みで動けなかったはずの俺の体は自由を取り戻していく。これが属にいう“根性”とか“気合”とかいうものな

のだろうか。

「頼むから・・・一緒にいてくれ・・・」

「でも・・・」

戸惑う鈴を見てみると、俺の脳裏には何故か“ノイズの世界”が蘇り、怖くてたまらなかった。そして恐怖が頂点に達すると同時に、俺は上半身を勢いよく起こし、掴んでいる鈴の手を引き寄せ、強く抱きしめた。

もういやだった。あの“ノイズの世界”も、鈴を守れなかった過去も、全部いやだ・・・ならせめて今だけでも鈴には隣にいてほしかった。俺にできたかけがえのない“親友”として・・・

「・・・わかりました・・・私はここにいます・・・」

鈴の少し膨らみをもった小さな両手が俺を不器用に抱きしめてくれている。それだけで俺はとても安心することができた。

こんなにも幸せを感じていられるのは、あの“ノイズの世界”を嫌というほどに味わったからなのだろうか・・・もうあんな世界には行きたくないけど、今はこの鈴の温もりを感じることができている間が一生続けばいいと思っていた・・・

「おや、えっと・・・仲がいいんだね・・・二人とも・・・いや！ノックはしたんだよ！」

「えっ！」

「ふえ！」

不意に病室の扉の方から声が発せられる。驚いてそちらに目をやると、そこには白衣を身に付けた三十歳くらいの男性が今病室で起こっている事態を見てか、戸惑いを隠せないといったふうに頭を掻いていた。それも当然である。何せ、三日間目を覚まさなかったはずのケガ人が突然目を覚まして、幼い女の子と抱き合っているのだから。

「かかかかか戒さん！これは違うんです！これには！その！深い事情があつて！」

鈴が戒と呼ばれている男性に向かって、森の時のように必死にジ

エスチャーを繰り返している。このままでは本当に過呼吸にでもなってしまうのじゃないのか？

戒と呼ばれる男性は、知的な雰囲気をかもし出す眼鏡をかけており、顔立ちもよく、白衣がとてもいい程に似合っている。

「えっと具合はどうだい？ 鮫我君」

鈴が顔を真っ赤にしたまま俺から離れる。なんだかそれを見てみると、俺も恥ずかしくなってきた。今思えば俺って2回も鈴と抱き合っている……大変なことをしてしまった……

「貴方が俺の手術を？」

「はい、私が貴方の手術を行いました。とは言っても腕のほうは折れてる以外、君が自分で縫っていましたけどね。ああ後、君の名前は鈴ちゃんに聞きました。」

そう言われて、俺は点滴がついているほうの右腕を見つめた。点滴をしている動脈の上には、ギブスらしきものがついており、その微かにはみ出ている包帯から、改めて俺が自分でこの傷の処置をしたんだということを実感でした。

「私はここで医者をしています。寺島戒といいます。よろしく」

俺のとなりまで歩み寄ってきた戒さんは俺に握手を求めて、手を出してくる。

「俺は八条鮫我っていいいます。ちょっと事情があってバスで旅に出てたんですが、その最中で……」

「ああ大丈夫ですよ。話は鈴ちゃんにあらかた聞きましたから」

俺も動く左手を差し出し、戒さんと握手を交わす。どうやら悪い人ではないようだ。

「ただ……一つ聞いてないことがあるんですよ」

握手を交わした後、戒さんはずれていた眼鏡を掛け直し真剣な表情へと切り替える。

「聞いてないことですか……」

少し疲れたので、俺は再び横になることにした。

「はい……」

戒さんはベッドの横にある背もたれのない椅子に腰掛けるともう一度眼鏡を掛け直し、俺へと視線を向けてきた。窓からの陽光が眼鏡に反射していてよく分からないが、恐らく眼鏡の奥には厳しい眼光があるのだろう。

「まず君が運ばれてきたときの状況と手術のことを報告しておきましょうかね。右腕の骨と肋骨数本が折れており、その折れた肋骨は肺に刺さっていました。手術はかなり危険なものでした。君が自ら縫ったと思われる傷は化膿し始め更に折れていました、「ポッキリ」とね。それに肺に肋骨が刺さっていたために、人工呼吸器なしでは生命維持が難しい状態でした」

聞いた内容は全部覚悟していたことだった。でも俺が考えていたものでは今頃俺は死んでいたはずだったのだが・・・

「なんで・・・なんでそんな状態で・・・俺は生きていますか？」その言葉と同時に鈴は「ニコリ」と笑い、戒さんは照れを隠すように頭を掻き始める。

「まさか・・・神の手なんて言わないですよね・・・」

そういった途端に、戒さんは頭を掻くスピードを速め、鈴は一層に笑みを深める。

「そのまさかですよ。戒さんはすごいお医者さんなのですよ」

「そんな・・・照れるなハハハハ」

戒さんは頭を掻き、鈴は「ニコリ」と笑みを浮かべている。その間、俺は「ポカン」としている他なかった。まさか本当に神の手というものが存在していたなんて・・・しかもその手に助けられたとなるとある種の感動があるな・・・

「まあその話は置いておいて・・・そろそろ本題に入りましょう」一瞬にして、病室の明るい雰囲気が凍りつき、冷たいものへと変わる。それほどまでに戒さんが浮かべる真面目な表情は、どこか怖いものがあつた。

「鮫我君・・・君はどうしてそこまでの傷を負ったんだい？鈴ちゃんもなんであんな状態だったのですか？」

「あんな状態？」

戒さんの言ったことに俺は疑問以外浮かばなかった。今俺の側に鈴がいるということは、俺は確かに鈴を守りきったはずだ。

「はい。鈴ちゃんはここに運ばれてきた時に40℃近い高熱を出していました。」

「熱・・・」

確かに高熱というのなら納得はいく。俺は鈴が怪我をすることは防ぎきったが、あの時の環境では寒さまではどうしようもなかったのが現実だ。

「それじゃあそろそろ説明をお願いしようかな・・・」

「じゃああの時の状況を順を追って説明します・・・あの時俺は森で鈴を励ました後、持ってきた水がもう残り少ないことに気付き、近くの川へ鈴と一緒に水を汲みに行ったんです・・・」

目を閉じて数日前の出来事を思い出す。不思議とあれから何日経っているかも分からないのに、その時の状況は鮮明に思い出すことができた。

―三日前―

暗く、肌寒い森を抜けた所に川はあった。水面には満月が映っており、流れこそ速かったが、そこは夕方の森と同じくらいに神秘的な雰囲気漂わせている。そこで鮫我と鈴は川の水をペットボトルに入れていく最中だった。

「すみません。私が喉を詰まらせたせいで・・・」

鈴はさっきから謝ってばかりだ。ここへ来る最中でも色んな事で数回謝られた。

「お前なくさっきから謝りっぱなしだぞ。水ぐらいこうやって簡単に汲むことができるんだからさ、気にしなくてもいいんだよ」

俺は満パンになった二？のペットボトルを置き、新しいペットボトルを用意し、水を入れる。

ここには一応ペットボトル数本と、もしもの時の為に俺が中身を考案した救急箱を持ってきたのだが、この調子ではあまり必要ないだろう。今水を入れているペットボトルと鈴が手伝ってくれている分が終われば、全部終了だからだ。

「にしてもここらへんってなんだか神秘的っていうか・・・綺麗だよな」

気軽に鈴へと話しかける。先程俺は鈴と親友になれたから、最初のような変な緊張感も今となっては存在しなかった。

「ここが・・・この景色がこの島の本当の姿なんです・・・」

俺はその言葉に少し寂しさを感じ、鈴の顔を横目にした。その顔は確かにどこか寂しいような表情を浮かべており、何か鈴が抱えていることがあるのだということが、すぐに感じ取れた。

一体この子はどれだけ、色んな事を抱えているんだろうか？

「どうしたんだよ鈴。そんな悲しいような表情浮かべてさ」

「えっ！そ・・・そんな事は」

鈴は俺にそう言われたと同時に、顔に両手をあてる。自分がどんな表情を浮かべていたのか確認したいのだろうが、今の鈴の顔には先程のような表情は表れていない。

「悩みがあるなら仲間に相談する・・・それが一番だぞ」

俺は水を入れ終わったペットボトルを置き、ゆっくりと鈴へと向き直る。

「大丈夫です。これは悩みというか・・・まあ大丈夫ですよ」

そう言いながら満面の笑みを浮かべる鈴からは、先程見られたような悲しさは全く感じられなかったので、俺はあまりそのことに深入りするのはやめることにした。

「分かった。そういうならあまり追求はしないよ。ただ、何かあるときは遠慮無しで俺に相談しろよ・・・まあそれができるのも今夜限りだけだな・・・」

「えっ！それってどういうことですか!？」

鈴が今している作業を止め、足早に俺の元へと駆け寄ってくる。

「どういふことって言われてもな・・・俺はここにはたまた来ただけで、鈴が住んでいる悠藻村には銀行で少し金を下ろすためによるだけだから・・・それが終われば俺はまた遠くに旅に行く予定だから、かな」

俺は淡々と話す、鈴にはかなり重く感じたのだろう。ゆっくりと頭を下ろし、今にも倒れそうな程に体の重心が安定していないのが分かる。俺はふらふらになっている鈴の両肩を固定し、「大丈夫か」と声を掛けた。

「そんな・・・そんなの嫌ですよ・・・」

小さく擦れた声の下を向いている鈴の顔から発せられた。それと同時にゆっくりと顔を上げる鈴だが、その顔には涙の粒がいくつも流れている。

「そんなの嫌です！一緒に・・・私は・・・鮫我さんと一緒にいたいです！一緒に勉強して！昼休みには他のみなさんとも一緒に遊んで！放課後は一緒に帰りたいです！・・・それから・・・それから・・・」

今の鈴を見ていると、俺の存在ってそんなにも大事なんだということが実感できて、嬉しいものがあつた。もう一度抱きしめたほうがいいのかと思ったが、さすがに少し恥ずかしかったので、俺は鈴の頭に片手を置き、撫でてやることにした。

「たまにその“ゆうもそん”っていうところに遊びに行くからさ、そんなに泣くなよ・・・」

俺は笑みを浮かべて、鈴は泣く。そんなやり取りを望んだわけではないのに、今はそうするほか何もできない。

少しの間そうしていると、鈴も諦めたのか、涙を拭い満面の笑みを浮かべる。しかし、まだ涙を止めることはできないらしい。その笑みには見えていて辛いものを感じられた。

「女の子の涙は・・・ぐすっ・武器に・・・なるんですよ・・・昔先生に教えてもらいました」

「ハハ・・・お前の先生って結構なことを生徒に教えるんだな・・・」

確かに俺には大ダメージだったな」

数回鈴の頭を撫でてやった後、俺は水を入れた数本のペットボトルを回収した。

「それじゃあそろそろキャンプ場、っていうかガソリンスタンドに戻るとするか」

「はい！」

そういつて鈴も水を入れたペットボトルを回収しに、元いた場所へと掛けていく。

それにしてもここにある自然は本当に素晴らしいものだと思う。水は綺麗で、川に映る満月は、写真に撮って大会に出品すれば間違いなく優勝できるであろうほどの美しさを放っており、その中には無数の川魚達が餌を求めて泳いでいる。ここをキャンプ地にすればいくら儲かるのだろうか検討もできないな・・・

「あっ！いけない！」

不意に鈴がそう叫ぶ。何事かとそこへと視線を向けると、スカートが少し濡れるのも省みずに川へと入っている鈴が視線に映し出された。同時に嫌な寒気と不安が、体中を駆け巡る。急いで今度は鈴が向かっている先に視線を向けると、そこにはさっき鈴が水を入れていたのであろう一つのペットボトルが岩に引っかかっており、鈴はそれを取りに行こうと川に入ったのだということがすぐに分かった。

いつもと違って、うまく焦りを隠すことができない。そうして俺も川へと入り、鈴を引き止める。

「駄目だ鈴！ペットボトルへいいから！早く帰って来い！」

この川は確かに神秘的で美しくもあるが、それ以上に危険でもある。川の中で転がっている石はぬるぬると滑るものが多く、流れも速いため、俺のように少し体力や筋力に自信があるものならともかくとして、鈴のように体の小さく、あまり筋力や体力の無い者であれば、一度足を滑らせたりして流された場合、どうなるか分からない。

「大丈夫ですよ！これくらい！すぐにあれを取って戻りますから！」
鈴は笑みを浮かべてそういうが、危険であることには変わらない。
俺はその場で頭を回転させた後、川を出て、俺が水を入れたペット
ボトルと一緒に置いていた救急箱を手にした。この救急箱はビニ
ル製の為、肩に担ぐこともできるし、何より、このような川の中
に入るのにも役立つ。俺は救急箱にビニールの紐を取り付け、それ
を背にした後、もう一度鈴の元へと向かおうとした。がそこにはもう
鈴はいない。

「まさか・・・鈴！」

頭の中が不安で埋め尽くされる。急いで岸を川に沿って数メート
ル走った後、足が付かないぐらいの水位がある川の地点で勢いよく
飛び込む。川は夜ということもあり、冷たく肌に刺さるものがあ
った。

闇雲に泳ぎ、鈴を探す。恐らく鈴はもうすぐで俺のいるこの場所
へと流されるはずだ。そう思いただ泳ぐ。瞬間、肌にか暖かいも
のがあたったのを感じ、俺は川へと潜り、それへと手を伸ばした。
握力には自信があるほうだが、暖かいものを手のひらがなぞって
いるような感覚こそするが中々それを掴むことができない。その間
も体と掴もうとしているそれは川の流れによって流されていくが、
そんなことを気にしている余裕も体力ももう無かった。少しの死闘
の末、やっとのことで俺はそれを掴むことができ、体へと引き寄せ
る。俺が掴んでいたのはどうやら足のくびれだったらしい。その
先に目をやると、流れによってなびくスカートと衣類、そして見て
はいけないスカートの中身などが、薄目で確認することができ、改
めてそれが鈴だと確認することができた。しかし、水の中では思
うように力を入れることはできず、俺は掴んでいる足を辿って鈴の
体上半身を強く抱きしめ、それごと水面へと顔を上げる。

「ゲホッ！ゴボッ！だいっ・・・じょうぶか！鈴」

俺は水が口の中に入るのも気にせず、鈴へと話かけるが、その返
事はない。鈴はぐったりと目を閉じ、どうやら気を失っているよう

だった。少し焦りながらも脈を確認すると、鈴の脈は正常に波打っている。

急いで辺りを見渡し、近くの岸を探す。しかし、暗闇に包まれたこの空間でそれを確認するのは至難の技だ。とにかく、体力の消耗を減らすため、ゆっくりと深呼吸を数回行い。鈴を背にした後、ゆっくりと辺りを見渡す。すると、目の前にギザギさと尖った大岩が現れた。まるで俺達がここにやってくるのを待っていたかのような雰囲気漂わせるそれは、最悪といっていいほどの配置で置かれている。このままでは川の流れもあり、俺達はこの大岩の鋭い出っ張りに刺さって・・・死ぬ・・・

急いで川を泳ぎ、その岩との距離を離そうとするが、その瞬間、背にしていた鈴が、俺の元から離れていった。

「しまった！鈴！」

俺の背から離れていった鈴はこのままではあの大岩へと突き刺さってしまふということが、状況から容易に想像するところできた。しかし、もう俺が行ったところで間に合わない。

今鈴を助けに行けば、俺が死んで鈴が生き残るだろう。だが、俺が助けに行かなければ、俺が助かり、鈴が死ぬ・・・

そう考えた瞬間、まるで時間が止まったかのような感覚が脳裏を横切った。

俺はこの子のなんなんだ・・・なんでこんなにも執着する必要がある・・・

『ビール・・・残念でしたね・・・』

初めて鈴にあった時、俺は鈴を幽霊だと思った・・・今思えば笑えることだ・・・

『お・・・おいしい・・・おいしいですこのパン！』

初めて赤の他人に俺が作ったパンを食べてもらった。それを鈴はおいしいってってくれて・・・なんだかとても・・・嬉しかった。『鈴ちゃんだなんて！鈴でいいです！』

胸がドキドキした。アレがなんだったのか今は分からないけど、

鈴がいたからあんな経験をすることができた。

『いえ、もうお腹いっぱいなんで……はううう』

強がるどころとか、変に遠慮するところとかが何だかおもしろくて……赤の他人としてこんなにも楽しいと思ったことなんてこれまでには無かった。

『こう……が……さん……あ……ありがとうございます……うええええん！』

そして俺はこの子を励ました。そんなことしか出来なかったから……そんな俺に鈴は言ってくれた。

『鮫我さん……私の……親友に……なってくれませんか？』

川に行くまでの最中に言ってくれたあの一言が俺にはどうしても忘れられなかった。初めてだった「親友になってくれ」といわれたのは……初めてだった、俺に親友ができたのは……鈴はたくさん初めての俺にくれた……じゃあ俺は？……

そう思った瞬間、時間と俺の体は同時とっていいほどに動き出した。このまま鈴を助けるということは、こんなにも神秘的で冷たい川で俺は死ぬかもしれないということ……けど鈴はどうしても守りたい……その思いが俺の体を突き動かした。

腕を、足を、全身を使って泳ぐ。出来ればこれからも鈴とはたわいもない会話を交わしていたい。それが駄目でも、鈴にはこれから生きて欲しい。俺の人生を掛けてでも……

腕を伸ばし、鈴のぐったりとしている片腕を掴み、それごと鈴の体を自分の体で抱きしめるように覆いつくす。そして目を閉じ、数秒後に来る死の恐怖へと歯を食いしばる。

瞬間、刃物で右腕を切られたかのような鋭い痛みと、肋骨を鈍器で殴られたかのような強烈な痛みが全身を駆け抜けた。が、どうやら俺は生きているらしい。全身には強烈な痛みが走り抜けるが、俺は鈴を抱きしめたまま持てる力の全てを使う勢いで岸を探した。しかし……

「えっ……うあああああああああ」

どこか高いところから落ちているような不思議な感覚。咄嗟に俺は体を反転させ、背を下へと向ける。それはほとんど本能的なものだったが、それと同時に背中に何か重量があるものが衝突したかのような痛みが全身を駆け巡る。そして意識は闇に包まれていった・
・
・
・
・
・

それからどれくらい経ったのかは分からないが、気が付いた時、俺と鈴は川の岸へと引っかかっており、奇跡的に助かったということが実感できた。しかし、その実感と同時に全身には斬られ、殴られ、衝突されたかのような無数の痛みが駆け巡り、気が気ではなかった。

「はぁはぁはぁ・・がはっ」

口の中から赤黒い液体が吐き出される。俺はそれを見ないようにし、まだ倒れている鈴の元へと、向かった。

ぐったりと目を閉じている鈴の首へと指をあて、脈を確認する。しかし、その脈は弱く、危険な状態であることがすぐに分かった。頭をフルに回転させる。昔読んだ人工呼吸のやり方を思い出す。がその間も全身は悲鳴をあげているかのように、痛み。腕からは大量の血液が滴り落ちていた。

「ごめんな鈴・・お前のファーストキスってやつを奪っちゃまう・
・
・」

俺はそういつて鈴に適切な処置を施した。そうして数分後、鈴は息を吹き返したが、俺の方はもう限界に近かったのかもしれない。近くの大岩に背を預け、持ってきた救急箱のチャックを開ける。自分の今の容態は多分把握できていた。右腕は大岩とぶつかった時にやられたのだろう、中に詰まっている肉が見えるほどにパツクリと割れ、そこからは今も直、血液が外へと流れている。まずはこの処置を施さなければ、俺は今から数分としないうちに出血多量で死ぬだろう。

開いた救急箱から、錠剤タイプの痛み止めの入った箱と傷口を縫

う為に必要な針と糸を取り出す。昔、戦争映画で、腕に傷を負った主人公が自分でその傷口を縫うというシーンがあつて、そのシーンに憧れて、持って来ただけの道具がまさか本当に必要となるなんて思つても見なかった。傷口を自分で縫うなんて想像もしたくないが、今はその処置をしなければ助からないのだから覚悟を決めるしかないだろう。

錠剤タイプではいくら痛み止めでも効き目はあまり期待できないが、それを箱から取り出し、数個口にする。しかし、効果が現れるまで待つような時間は今の俺には残されていない。そう思い、俺は針に糸を通し、過去に読んだ、医療についての本を思い出す。そして針を腕に刺す・・・

「うっ！・・・」

傷口に針を刺し、それを縫うなんて作業は思っていた以上に苦痛なものだった。縫っている最中、傷口からは大量の血液が流れ、それを見るたびに手が振るえ、その振るえによる痛みが全身を掛ける。早く作業を済ましたと思い、俺はただ黙々と痛みに耐えながら、手を動かした。

「ううう・・・ここは・・・」

最悪だった。作業の途中で鈴が目を覚めたのだった。急いで縫っている右手でさっき処置を施すために脱いだ、自分のシャツを鈴の顔に向けて投げる。シャツは目的通りに鈴の頭へと掛かり、その視線をさえぎった。

「な！何ですか！」

慌ててそれを取ろうとする鈴に対して、今度は俺が叫ぶ。肋骨が痛むがそれを今は無視するしかなかった。

「鈴！俺だ！鮫我だ！いいか絶対にそのシャツを取るなよ！俺が合図を出すまでは絶対だ！それから耳も塞ぐんだ！全部済んだら俺がお前の肩を叩くからそれまでは絶対に耳を塞いでるんだぞ！」

「どうして・・・」

意味が分からないといったふうにシャツを除けようとする鈴に対

して、俺は傷の痛みからか大声で怒鳴りつけた。

「いいからいう通りにしろ！」

「ひっ！」

そうして鈴は俺の言った通りに耳を塞ぎ、シャツを被った。

怒鳴ったことに罪悪感を感じているが、それ以上に今は痛みを優先した。もし鈴が今の俺の状態や流れ出る大量の血液を目の当たりにでもすれば一生のトラウマとなってしまいうだろう。それだけは防ぎなかった。

そうして再び作業を開始する。しかし、痛み止めが多少効いたのか、それとも俺の感覚が鈍ってきたのかそれからの作業は前半の作業と比べて、あまり痛みを伴わなかった。縫い終わると、俺は救急箱からガーゼと包帯を取り出し、傷口を隠した。恐らくこのままではこの傷口から大量の菌が入って、化膿するだろうがそんなことを気にしている余裕はもう無い。

俺は荒れた呼吸を整え、何事も無かったかのように振る舞い鈴の肩を叩いた。鈴の肩はよく見ると振るえていた。俺が怒鳴ったせいかもしれない。

「悪かったよ鈴、怒鳴ったりして」

よく見ると、鈴はまた泣いていた。全く、俺は今日だけでどれだけ鈴を泣かしているのだろうか・・・

「ごめんなさい・・・私がいうことを聞かなかったせいで・・・」
今までの流れでは、このまま俺は鈴を抱きしめなければならぬのだが、そんなことをすれば恐らく肋骨が持たないと思い、俺は鈴の頭をゆっくりと撫でその場を後にした。

今俺の目の前には立派な滝が広がっている。それを見ていると、なんとなくだが状況が掴めてきた。俺はあの時、鈴を庇って傷を受けた後、目の前にある、この滝から落ちたらしい・・・通りで宙に浮いたかのような感覚がした訳だ・・・

「でも・・・これからどうするか・・・ッ！」

瞬間、包帯で隠した腕の傷が疼き顔を顰める。ハッキリとは分か

らないが、そろそろ傷口が化膿してきているのだろうか？

腹を割った話、今の状況は絶望的だ・・・

俺の体を駆け巡る痛みに耐えるだけでも辛いのに、滝を中心とした周りには未開の森ときた。この未開の森を今の状況で闇雲に進むのは自殺行為に等しい。

腕の痛みを気にしつつも、俺は目の前の断崖に手を添えてみた。

流れる滝の横にあるその断崖はどこを見ても突起が目立っており、それを見ていると、どうすれば生きてこの状況を打破できるか容易に思いつくことができた。そう・・・ロッククライミングである・・・

数年前に、ロッククライミングについての記述が書かれた本は読んだことがあるので、俺にとってこの状況は簡単に打破することができる。しかしそれは体調が万全で、なおかつ一人の時の話である。今は気を抜けばいつでも倒れそうな状態ということだけでも深刻なのに、それに加えて鈴も一緒だ。未だ嘗てここまで絶望的な場面は体験したことがない。

「鮫我さん・・・怖いです・・・」

背後から発せられた声に反応して振り返ると、そこには顔を真っ青にした鈴が身を縮めて俺の背後に立ち尽くしていた。その顔は明らかに俺に助けを求めているもので、それを見ていると、どうしてもこの子だけでもちゃんとした暖かい家に帰してあげなくてはという思いが強まっていく。すると体は自然と彼女の元へと向かい、鈴が少しでも安心できるようにゆっくりと、でも優しく抱きしめていた。そして気が付いた時には、俺は鈴を抱きしめた状態で、数回彼女の頭を撫でていた。有難いことに不思議と肋骨は痛まないでいた。「安心しろ、お前は俺が守る。ちゃんと帰れたら・・・そうだな、またパンを焼いてやるよ！だから、なっ！安心しろよ」

そう言って笑みを浮かべてやると、鈴は瞳から大量の涙を溢れさせながら、俺にしっかりと抱きついてくる。

「・・・ひっく・・・ありがとうございます・・・パン・・・楽しみ

です！・・・」

俺の胸の中から発せられる鈴の涙混じりの声や、その温もりを感じていると、なんだか力が湧いてくるような感じがして・・・それは段々と覚悟へと変わっていった。

「ああ・・・楽しみにしてな」

そう言って俺は鈴を胸から引き離れた後、先程使った救急箱の元へと向かい、その中にある、まだ残っている痛み止めの錠剤を数個飲み込む。

「鮫我さん、その薬は・・・」

鈴の不安そうな声が背後から聞こえるが、俺は笑みを浮かべて返答を返す。

「これは・・・ちょっとした栄養剤だよ」

振り返ってみると、鈴はまだ少し不安そうな表情を浮かべているが、俺はそれを見殺して断崖の目の前へとむかった。

正直な話、俺は怖いという意思で埋め尽くされそうだと。痛くて、怖くて、鈴をちゃんと守れるのかという不安・・・それが体を支配している心や脳内で無数に駆け巡っている。でもここでじっとしていても助かりはしない。

目の前の断崖を登れば、元に戻る。あのキャンプを張っているガソリンスタンドまで戻れば、鈴の住んでいる“ゆうもそん”という場所までは運転手さんに送ってもらえる。そして到着後、ちょっと鈴の家のキッチンを借りてパンを焼いてやる。

そのイメージを常に忘れない。そうすることで俺は恐怖に打ち勝っている。

「鈴・・・今からこの断崖を登る」

「えっ！それって！」

「最後まで聞いてくれ！」

鈴が何かを言おうとするよりも早く、それを静止させる。

「今の状況からして無事に帰るにはこの断崖を登るしかないんだ。俺がお前を背負って登るから・・・俺を信用してくれないか？」

振り返り鈴を見ると、鈴は真剣な表情で俺の目を見て「コクリ」と首を縦に振った。

数分後、俺は鈴を背に暗闇に包まれた冷たい断崖を寄り添うようにして進んでいた。

胸板は腹部には、ひんやりとした断崖の温度を感じ、背には鈴の暖かい温もりを感じる。きつともうすぐで頂上へと到着できるはずだ。そうでなくては、ハッキリいってもう指の感覚がなくなっているのだ。きっと鈴が背にいないければもう俺はこの断崖から落ちていたことだろう。

「鮫我さん！」

俺の背に捕まっている鈴の声に反応し、俺は進めている手を止める。

「どうした鈴？」

言い終わると同時に、俺は何故鈴が声を出したのか肌で感じるこ

とができた。

雨だ。気が付くと、瞬間的に大量の雨粒が空から降ってきた。同時に強い風も吹いて来る。

「空から自然が降ってくる、ってか・・・ちょっとやばいかな」

そう言いながらも、上へと向かうためにただ手を動かす。今はひたすらに腕を動かすしかないのだ。そうでなければ、いずれ落ちる。

「安心しろ鈴！こんな雨気にならないから」

やせ我慢だ。それは鈴だって分かっているのかもしれないが、それでも言わないよりはマシだろう。

冷たい大粒の雨が俺のズボンに染み込んでいく。それによって段々と重くなる身体。そして感覚を失っていく指先。このまま大雨が続いてしまうと、完全に感覚を失った指先では横から吹いてくる強い風に耐えることができないだろう。背にしている鈴の体温も段々と冷たくなってきている。もしかしたら凍死もありえるかもしれない。

「なんだんだよ！やめよ雨の馬鹿野郎！」

自然に対して思いをぶつけるなんて馬鹿らしい行動だけど、どうせこのままでは叫ぶこともままならないような状態になってしまうのだ。それなら今やれることは今やっておくべきだと思った。

「やめつつてんだよ！うおおおお！」

とうとう指先の感覚がなくなってしまった。これ以上進もうとすれば地面へと急降下してしまう。だから今の俺には崖に密着して叫ぶしかできなかった。

もう駄目か……

「……鈴……ごめ……えっ！」

諦めようとしたその瞬間、気のせいか雨が弱まった気がした。しかし、数分後それは気のせいではなかったと実感した。雨が止んだのである。横から吹いていた強く冷たい風も少し温かく弱いものへと変わっている。

「これならいける！」

全身に力を込め、顔を指先の近くまで近づける。そして俺は生暖かい吐息を指先に集中して吹きかける。こんなことでどうこうなるとは到底思えないが、それでも今のままでは指先を動かすことはできないのだ。今はただ少しの希望でも捨てたくない。

そうして俺は、数分それを繰り返し自分に「大丈夫。登りきることはできる」という暗示をかけ、再び腕を動かした。人間、思い込みをすることで想像以上の結果を生み出すことができるという内容が書かれた本が脳内を横切ったおかげで、どうにかまた前進することができた。

少しして、遠く横で流れている滝へと視線を向けると、滝の川がもう少し上の地点で途切れているのがわかった。つまりもう少しで頂上へとつけるということだ。

期待を胸に断崖を登るスピードを上げる。もう少しで到着すると分かっただけでも、少し前とは比べ物にならないほどやる気が湧いてきた。そして右手が頂上に付き、俺は鈴に声を掛ける。

「鈴！到着したぞ！」

そう言って鈴を頂上、川の岸付近へと上げる。これで助かる。また鈴とたわいもない会話をすることができる。しかし、その思いは次の瞬間、粉々に打ち壊された。

「うあ！」

手を掛けていた右手が雨粒のついた岩の表面を滑り、全身のバランスが崩れる。そしてその腕は勢いよく崖の突起した部分に衝突した。

ボキッ！ゴキッ！

「ぐあああああああ！」

全身に激痛が駆け巡る。痛みと同時に聞こえた「ボキッ」という音はおそらく右腕の折れた音だ。そしてもう一つは肋骨が折れた音・

痛い、けど死にたくない。その思いが、俺を支えたのだろう。頂上に手をかけている左手は震えながらも、未だその手を岩から離していない。

「鮫我さん！」

上で鈴が俺の左手を掴む。先程以上の痛みが全身を駆け巡るが、俺は生き残りたいがためにそれに耐え、足元の小さな突起した岩を足場に力を込め、頂上へと登る。しかし、上に上りきった瞬間、また耳を塞ぎたくなるような音が全身に木霊した。

グチュ！

その場に立っていることができず、俺は地面に倒れこんだ。これはもう痛みとっていいのか、痛みという言葉でまとめるにはあまりにも不具合なぐらいに俺はその“表現することができない”全身を駆け巡る“何か”に苦しんだ。

「×××××」

鈴が何かを言っているが、何を言っているのか聞き取ることができない。

息が出来ない。胸が苦しい。

視界が真っ暗に染まっていく、俺はどうとう死ぬのか・・・せめて鈴の前では死ぬ瞬間なんて見せてくはなかったけど、これが運命なら仕方がないのかもしれない。

ただもう・・・疲れたよ・・・

俺が三日前に起こった出来事を説明し終わると、戒さんは「ちょっとまとめてくるよ」といって病室を後にしていった。何をまとめるのかは分からないが、それが仕事なのだろう。気が付くと部屋には俺は鈴の二人だけとなっていた。

今更になって気が付いたのだが、鈴の服装が三日目とは違って私服らしくなっている。頭には、装備した少女に幼さと愛らしさを持たすことができるピンク色の大きなリボン。穢れの知らない体を連想させる白のワンピースを着こなしている今の鈴は、まさに理想の少女といってもいいと思うぐらいに可愛らしく見えた。

「私服、似合ってるじゃんか」

そう言って三日ぶりに鈴の頭を優しく撫でてみた。すると鈴は、初めて俺が彼女の頭を撫でた時と同じように顔面を赤色にし、俺に顔を見られたくないというように顔を下に伏せる。

「えっと・・・ありがとうございます・・・りっ、りんごでも剥きますね！」

鈴が持ってきてくれたらしいたくさんフルーツが盛り付けられた籠から彼女はリンゴを一つ取り出し、その中に入れていたらしい果物ナイフを手につけてリンゴの皮を剥き始めた。

少しの平穏。俺が望んだ世界。結局以前感じた鈴に対しての感情は何か解らないけど、今はただ平穏を楽しむとしよう。

「って！そうじゃないです！」

「へっ？」

さっきまでリンゴの皮を剥いていたはずの鈴が、いつの間にか俺の目の前へとやってくる。ベットの脇に手を置きながら重心を保ち

身を乗り出している鈴の表情は、何かに怒っているようだった。

「えっと・・・鈴さん？」

・・・訳が分からない。俺って何か悪いことしたっけ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙を続ける鈴。俺はただ黙って目の前の少女が口を開くのを待つしかなかった。

「なんで・・・なんでもっと自分のことを考えてくれないんですか！」

「えっ？」

やっと発せられた言葉はよく分からないもので、俺はやっぱり不思議そうな表情しか浮かべることができなかった。

「えっと・・・それはどういう」

「もう！」

「ポカ」という効果音が出てもおかしくないぐらいに弱弱い攻撃が胸板を連打する。しかし、今の俺にとってその攻撃は絶大なものであった。

そう・・・色んな意味で・・・・・・・・

(このシチュエーションは！やばい理性が！)

激しい痛みと、何か分からない苦しみが全身を襲う。

勝手に動こうとする左腕を理性で抑える。が同時に激しい痛みがその腕に伝ってくる。

この現象はまるで、アニメ名作映画「カリオ〇トロの城」で主人公「ル〇ン」が最後に見せたものと同じ。ラストシーンで彼は助けたお姫様に抱きつかれる、しかし、抱きしめてしまうと、この先のお姫様を危ない世界へと連れて行ってしまうと思った「ル〇ン」は抱きしめたいという感情を必死に抑え、お姫様を自分から引き離す。

俺も同じだ。今鈴を抱きしめてしまうと、鈴を“危ない世界”へと・・・って何考えてるんだ俺！

「はっはにを言ってるんだ君は！ほへには全く自覚が・・・」

もう冷静を保つことなんてできない。体は痛いのに勝手に動こうとする。こんな現象今まで体験したことがない。

「腕です！」

「へっ？」

言われて腕に注目してみるが、特に先ほどと同じで、ギブスぐらいしか目立った傷はない。

「？」

分からないといった表情で首を傾げてみる。すると鈴は先ほど以上に力を込めて俺の胸板に固めた両拳を連打する。その威力はもう「ポカ」ではなく「ボコ」という効果音が相応程の威力となっていた。

（もしかして鈴・俺が怪我人ってこと忘れてないか？）

「自分も怪我をしているならなんであんな崖を登ろうとしたんですか！そんなに無理しなくてもよかったじゃないですか！なんであの時私よりも自分を優先しようとしなかったんですか！」

顔を伏せ、ひたすらに連打を繰り返す鈴。しかし、その連打の威力はもう少女のものとは思えない程に強力なものとなっていた。

（ちよっと待って・・・なんでこいつにこんな力が・・・）

苦しい。これはもう変な気持ちとかじゃなくて、純粹に苦しい。

そういう俺って三日前まで肺に肋骨ささってたんだっただよな・・・

・

「わかった・・・わかったからもうやめてくれ・・・」

必死に喉から声を出して鈴を静止させようと試みるが、鈴は全くこっちの声が聞こえてないかのようにひたすらに手を止めない。

「わかってないです！・・・ホントに心配したんですよ！」

（もう駄目だ・・・ここは最後に軽い冗談を・・・）

「あんた・・・いいパンチ・・・ごほっ！」

「わかってないです！わかってないです！」

（こいつ全く聞いてない！）

鈴はもう何を言っても止まりそうになかった。漫画とかでよく死

にかけの奴は最後にギャクをいうけど、実際はそんなの言える分けもなかった。

（もう駄目だ・・・こんなの・・・シャレにならない・・・）

視界が真っ暗に染まっていく、俺はどうとう死ぬのか・・・なんてこった助けた女の子に殺されるなんて・・・こんなことならあの時抱きしめとくんだった・・・な・・・

「ちよつと鈴君何してるんだ！」

暗闇で染められた視界から戒さんの声が発せられる。まだかろうじて耳は聞こえているようだ。

ピッピッピッピッ

俺に付けられていた心拍数を測る装置から激しい音が発せられている。

「えっ！あつ！鮫我さん！死なないください！鮫我さん！」

暗闇から鈴の声が発せられる。やっぱり鈴の声を聞いていると安心するな・・・

でも・・・やばい・・・俺今度こそ死ぬかも・・・

そうして俺の意識は再び闇へと向かっていった・・・

結局、俺はそれから数時間後、もう一度戒さんの手によって蘇生されなんとか一命は取り留めることができた。戒さん曰く、それは殆ど奇跡のようなものだったらしい。本当だったらもう死んでいても不思議ではないそうだが、どうやら俺は自分でも驚くほどの生命力を身に付けているらしい。まあ退院は数ヶ月伸びてしまったのだが・・・

窓から差し込んでいた陽光も今となっては微かに明るい月光へと姿を変えている。

「鮫我さん！鮫我さん！鮫我さん！」

今の状況を説明すると体を起こしている俺の体に涙で顔面がグチャグチャとなった鈴が抱きついて離れないといったところか。別に

やっと「ごめんなさい」以外のことを口にしたと思えばこれだ。

「じゃあ許すかわりに、お前には俺のいうことに従ってもらう！それでどうだ！」

やけくそでそういつてみると、どうやら鈴も納得したらしい。泣きながらも首を「コクリ」と縦に振る。

「私に・・・ひっく・・・できること・・・なら・・・ひくっ・・・なんでも・・・」

「ならまず最初の命令だ。取り合えず泣くのをやめて今日は帰ってくれ。もう眠くて眠くてたまらないんだ」

軽くあくびをしてみると、鈴は両手で涙を拭い俺に一礼したあとゆっくりと病室を後にしていった。

正直な話、眠いなんて嘘だ。本当は全身に激痛が駆け巡っていて、泣きたいぐらいだ。

それから数分後鈴がこの病院を綺麗な黒髪をし大人の女性を思わせるきっちりとしたスーツを身に付けた二十代後半ぐらいの女の人と出て行くのを病室の窓から確認すると、俺は糸の切れた操り人形のようにぐったりとベッドに寝そべった。

きつとあの女の人はこの病院の人だろう。手を繋いだ状態で、彼女が鈴を励ましているかのような状況が見て取れたので、俺は不安など微塵も感じなかった。いや、痛みで今は自分を優先したのかもしれない。また鈴に殺されたらたまらないから・・・

程なくして病室に「コンコン」という扉を叩く乾いた音が木霊した。

「えっと・・・どうぞ」

あまり患者になるということは体験したことがないので、どう反応すればいいのか分からなかったが、以前に自宅で見た刑事ドラマのワンシーンがこんなところで役に立つとは思わなかった。

俺の言葉の後に扉は「サー」という静かな音をたてて開かれる。扉の先にいた戒さんはカルテットを手に「失礼するよ」と言い終わると、俺が寝ているベッドの脇までやってきた。

「君も災難だったね。鮫我君。大丈夫、鈴君は僕の妻がちゃんと自宅まで送っていったから」

「綺麗な奥さんですね。羨ましいですよ」

「おや見てたのか、まいったなあハハハハッ」

戒さんが照れ隠しに頭を掻きながら笑いだす。

その笑顔は患者に希望を与えるものに違いない、こっちまで笑みを浮かべたくなる程、その笑みにはどこか優しいものがあつた。

「まあ近いうちに妻を紹介しますね。それじゃあ今日最後の診察としましょう。何か痛み以外に以上はありませんか？熱とか、右腕以外にどこか痛むとかはないですか？」

言われて、少しだけ体を動かしてみる。力は籠らないが、左腕・右足・左足全て異常なく動かし、特に頭が痛いということもない。

「えっと・・・大丈夫みたいです」

俺の対応に應えるかのように戒さんは胸ポケットから一本のボールペンを取り出し、カルテットに何かを記入する。

「はい！では次に・・・」

記入を終えるとすぐに次の質問を問い掛けられる。そうして数十分もの間診察は続いた。最後の方は訳が分からない心理问题までやるはめになったが、なんだか今日は生きている実感というものを強く感じられた一日だった気がする。あの“ノイズの世界”を除いては・・・

「あれ！っ！」

ベットから起き上がると同時に体中が悲鳴を上げる。

気が付くと、窓からは朝の到来を告げる眩しい陽光と、小鳥達の囀り。どうやら俺は昨夜の診察が終了するのとはほぼ同時に眠りについたらしい。今もだがこんなにも体中が痛いによく寝れたものだ。よほど体に投与された薬がきいたのだろう。

体が痛むのもう一度ベットへと寝そべり、辺りを見渡してみる。昨日はなんだか色々あったのであまり意識していなかったのだが、この部屋も中々広いものだと思う。畳み四畳以上はあるかな・・・ベットの近くには小さなテレビ。後は扉の近くに洗面所やらなにやらがあるこの部屋は、一人部屋としては中々の質を持っている。

サー

部屋の中に扉がスライドして開いている音が響き渡る。

「あら、ごめんなさい。まだ寝てると思って・・・」

不意に俺に対して向けられているであろう声が耳に入り、そちらに首を動かすと開いている扉の先には、見事とっていいほどにナース服が似合う二十代後半ぐらいであろう女性がいた。

「あつ、あはようございます。えっと・・・戒さんの奥様でしたよね」

そういつて軽く声をかけてみると、目の前の女性は頬をピンク色に染め、「恥ずかしい」といわんばかりのポーズをとった。

「奥様だなんて。私は寺島命っていいいます。よろしくね」

そういつて俺に対してウィンクする命さんだが、この人は誰にでもこんな接し方するのだろうか。男性に対してウィンクをするというこの危険度を今度戒さんに伝えておく必要があるな・・・

「どうですか体調のほうは？」

少し考え事をしている間に、気が付くと命さんは俺のベットの脇までやってきていた。

ほのかに甘いような、男心をくすぶるようなよく分からない香りが俺の鼻を刺激する。一体どんな香水をつけたらこんないい匂いになるんだ？

「まあ体がまだ痛みますけど、それ以外は大丈夫だと思います。患者の俺がいうのもなんですけど」

布団で顔を隠しながらそう応える。おそらく今の俺の顔は女性が見たら“気持ち悪い”というであろう程に変なニヤケを浮かべている。これもきつと命さんの体から発せられる香しい匂いのせいだ。

きつと慣れるまでにはもう少し時間が必要だろう。

「ホントに大丈夫？ 朝食は食べれそう？」

そういつて命さんは俺が被っている布団を軽く揺すってくれるが、そんな些細な行動でさえ俺にとっては重症だ。こんなにも美人な人が、それも男心を揺さぶるような香りを漂わせている人が、俺が理想としている寝起きパターン2である「布団を揺さぶる」という行動をとっているのだから、これは一大事といってもいいだろう。全くこの短期間で俺はどれだけ理性を抑えるということを行っているのだろうか、自分でも馬鹿らしくなってくる。

俺からして、命さんは“姉・ナース”属性を持っている。このダブルコンボは男が憧れるコンボといってもいいだろう。しかし、命さんは人妻。そう、もう結ばれているのだ。

（あきらめろ俺！ 理想は叶わないから理想なんだろう！）

そう言い聞かせ布団の中で、動く左手を使って顔に一発ビンタした後、俺はベットから起き上がった。

「大丈夫です！ もう腹が減って仕方がなかったんです」

無意識か、息を止めていたせいで完全な裏声となってしまう。

「わ・・・わかったわ・・・ちよつと待っててね」

命さんは予想通り、遠慮がちな笑みを浮かべ、病室を後にした。病室に冷たい空気が漂う。

（俺って格好わりい・・・）

そう思いながら俺は、数分後“戒さん”が運んできてくれた朝食をただ静かに頬張るのだった。

「ごちそうさまでした」

両手を合わせ、朝食を終える言葉を口にする。

「はい、じゃあ食器を提げますね」

そういつて戒さんは俺が食べ終えた朝食が入っていた盆を手になち上がると、淡々と部屋の中に入れておいた配膳トレーにそれを置

く。トレーの上には俺が先ほど食べた朝食が入っていた盆以外には何も置かれていなかったので、おそらく今この病院に入院している患者は俺だけなのであろう。壁に掛かっている時計に目をやると、時計の針は午前八時十五分を刺していた。

「それじゃあ朝食も終わりましたので朝の診察に移りたいと思います」

戒さんはそういつてベット脇に置いておいたカルテットを手にすると、白衣の胸ポケットから昨夜と同じボールペンを取り出し、数分間の診察を始めた。

内容は昨夜と同じだが診察中、戒さんが浮かべている表情はどこか生き生きしている。何か良い事でもあったのだろうか？

「はいこれで診察は終了です」

診察が終わってもやはり戒さんの表情は生き生きとしている。

「あの、なんかあったんですか？」

試しに聞いてみたら、戒さんはまるで俺がそういうのを「待ちました」といわんばかりの明るい表情を浮かべる。

「実は君のお見舞いに色んな人が来ているんですが、入れてあげてもいいですか？」

「俺に見舞い？」

一体誰がと思いつながらもゆっくりと首を縦に振る。すると戒さんは俺の行動を読んでいたかのように、俺が首を振るのとほぼ同時に扉の方へと向かった。

「入ってもいいですよ」

そういつてゆっくりと扉を開ける戒さん。そして俺は扉の先に天国を見た。

扉の先にいたその人物は、頭には“理想的なカチューシャ”を、そして体には“理想的な衣服”を身に付けていた。そう今扉の先にいる人物は一言でいえば“メイドさん”だ。それも日本という、家政婦のような和服ではなく、外国から日本に渡ってきた時のありのままの姿、つまりはシワ一つ無い長袖に首元には小さなリボン、そ

して足を隠し切っている長い、これもシワ一つないスカートをした姿だ。しかしそれだけではない。一番大事なのはその”メイドさん“の身長だ。もう認めるしかないだろう、俺は立派な子供好きだ。扉の先で恥ずかしい表情を浮かべ、”理想的な衣服“を身に付けているのは、俺が昨日まで一緒にいた、親友だった。

口が思うように動かない、体も異常はないのに硬直している。でも今はただ目の前にいる“夢”を自分の目に焼き付けたかった。こんな光景は、もう見ることはできないだろうから……

「……チェック……」

（もう駄目だ……抗うことなんてしたくない……俺は夢をこの手に……）

意識していないのに口が、決着の前兆を継げる合言葉を口にする。しかしもう抗うことはしようとしなかった。もう理性なんてどうでもいい。

「おおよっぱり効果は抜群みたいだな！」

不意にベッドの横から声が発せられる。

焦りながらもそちらに目をやると、少し茶が目立ち、ごく普通の高校生を思わせる整った髪をした青年がベッドの横に置いてあった円椅子に腰掛けて俺のことを観察しているかのような視線をこちらに向けていた。

どうやら俺は目の前の夢に夢中で、声を掛けられるまでこの青年の存在を感じなかったらしい、しかしそのおかげでなんとか理性は完全に死なずにすんだ。

「えっと……君は？」

なるべく扉の先で、未だ恥ずかしそうな表情を浮かべている夢を視線に入れないように俺は窓の外を眺めながらそう青年に問う。こんな光景他人がみれば、気取っているかよほどの人見知りのように見えるかもしれないが、それでもしないと俺はまともに口を動かすこともできないだろう。

「俺は川瀬五木。どうだい鈴ちゃんのあの格好！素晴らしいだろ？出

来れば感想を聞かせてもらえると嬉しいんだけど！」

「・・・・・・・・・・」

肩に手を置かれるが、俺は無言を貫いた。少しの沈黙が病室を漂う。

「あつと・・・鈴ちゃんもういいよ着替えてきなよ」

五木という青年がそういうと、廊下を走るような音が聞こえてきた。おそらく鈴の足音だろう。

「えっと・・・ごめんよ・・・」

五木という青年がそう言おうとするが、俺は素早く視線を青年に向け、青年の胸倉を掴んだ。

「やめないか鮫我君！彼は君の為に・・・」

「・・・・・・・・・・ありがとう・・・」

戒さんの声に隠れて、ポツリと声を漏らす。

さつきは鈴がいたから言えなかったが正直なところ、この五木という青年には感謝の気持ちしか浮かんでこない。俺が今まで理想としていた夢を彼は再現してくれたのだから。

すると青年は何もかも悟っているかのように優しい表情を浮かべ、もう一度俺の肩に手を置いた。

「・・・男の・・・夢だもんな」

「ありがとうございます！」

今度は大声でお礼をいう。それは俺に夢を見せてくれたことへの、そしてこの思いを理解してくれたことへのお礼だった。

「いいってことよ！鈴ちゃんの恩人は俺の恩人でもあるからな」

満面の笑みを浮かべる彼はなんとなくだが、悪い人には見えなかった。そうしてそれから私服に着替え終わった鈴も病室に入ってきて、有意義な時間を過ごした。

こうして俺はこれから長い付き合いとなる川瀬五木と出会ったのであった。

アカハラが飛ぶ島 < 雛13 > (後書き)

すみません。今回はとりあえずここまで投稿させていただきます。後は完成次第投稿したいと思うのですが、文章を読んでもくださいました読者の方ならわかると思いますが、僕はかなり長ったらしい文章を書くのでもしかしたら投稿はまだかかるかもしれません。

しかもまだまだ作品は前半も終わっていないのに・・・

まあもしこの三話目を見てくださいました人がいらっしやいましたら、どうか次もあきずによりしくお願いします。

アカハラが飛ぶ島 < 雛14 > (前書き)

一週間ぶりに投稿させていただきます。今まで<アカハラが飛ぶ島>を読んでくれていた読者の皆さま、申し訳ありませんでした。これからは「もっと話数を増やして文字数を少なくします」今までひたすらに文字数が多くて読みにくかったと思いますが、極力これからは文字数を少なくするように心がけますので、これからもよろしく願います。

アカハラが飛ぶ島 < 雛 14 >

(4) 第二次理性保持戦争

そこは風通しのいい、キッチン。

そこで調理をしている二人は第三者から見れば、まるで仲のよい兄妹のように見えることだろう。

必死に小麦粉を練っている鈴の後ろで、腕を組んで鮫我がその様子を優しく見守っていた。

今鮫我はいつかの約束、「パンを焼いてやるよ」という願いを叶えてやっているのだ。最もまだ「あまり利き腕を動かさないほうがいい」と戒さんに忠告をうけている以上、パンを焼くわけにはいかない。そこで当初の目的を変更し、鈴にパンの焼き方を教えてやっているのだった。もちろんキッチンには鈴の自宅のものを借りている。「そうそう、いいこね具合だその調子」

「はい！」

俺が指摘すると鈴は笑顔で返事をしてくれる。この数ヶ月の入院生活、俺はこの笑顔を十分に堪能した。鈴の友達もたくさん紹介してもらった。その友達に一回鈴のコンプレックスについて真剣に話し合った時もあったけど、あいつらその話を真面目に聞いてくれて、その後鈴に土下座までしている様子をみていると、鈴はホントに幸せなんだなど、少し羨ましかった。

「・・・さん・・・鮫我さん！」

「・・・ん？・・・ああ悪い悪い」

少し思い出に浸りすぎていたらしい。鈴はもうとくにパンの生地をこね終わっており、体中小麦粉まみれになっていた。

・・・これはこれで男心がくすぐられ・・・ないよな・・・

「後はこの生地を形にして焼くだけだから、後は俺がやっとくよ。お前今日学校あるんだろ？時間大丈夫なのか？」

そういつて左腕につけていた腕時計を鈴の目の前まで持っていてやる。すると鈴は「しまった」といった表情で急いで二階にある彼女の自室へと向かっていった。

「おい！行く前にちゃんとシャワー浴びてくんだぞ！」

不意にリビングの扉を開きかけている彼女にそう呼びかけると、彼女は耳を真っ赤にしてこちらに振り返ってくる。

振り返った彼女の顔は全面が真っ赤になっており、風邪でもひいたかのようなであった。

人ってこんなにも急に熱を持つことができるもんなんだな・・・
「えっ！それは・・・ちょっと・・・」

様子からして明らかにこの子は大きな勘違いをしている。

顔を真っ赤にし、口をアワアワとさせている彼女を見ていとなんだかこっちまで恥ずかしくなってきた。この子にとって俺とは野蛮人にでも見えているのだろうか？全く失礼なことだ。

・・・まあ正直なところ、野蛮人になりつつある自分がいることも確かだが・・・

「違うって！お前今小麦粉まみれだからシャワーを浴びろってこと！」

そう返答すると、彼女は自分の考えが見透かされているのがわかったのか、先程まで生地をこねていた両手で顔を隠し、その場から走り去っていった。

できることなら走り去る前に小麦粉まみれの両手で覆った、その顔をみておきたかったものだ。きつと今の彼女の顔はまるでピエロのように真っ白になっていることだろう。

その表情は恥ずかしそうなのに、顔は真っ白でピエロみたいだという今の鈴の顔を頭に浮かべるとなんだか面白くなってきて、俺は声をあげて笑った。

しかし、最近の子供はどこでそんな“大人の情報”を手に入れているんだか・・・

満足いくまで笑ったので、俺は鈴がこね終わった生地をある程度

の形に整え始める。そして整え終わった生地をオーブンの中へと入れた。

このパンが焼き終われば、俺はこの“悠藻村”を出て行く。みんなに迷惑をかけすぎたからってのもあるけど、これ以上ここにいたら、俺帰れなくなる気がする。

時間というのは不思議なものだ。なんでも無い時は遅く経過するものなのに、こんな時に限って時間の経過が早いのだから。

オープンからは香ばしい溶けたバターの染み込んだパンが焼けたことを知らせているかのように幸せを思わせる匂いが漂いはじめた。

散歩が出来るようになってこの村について少し分かってきた。

まあ過疎化しているというのは、村の商店街などを歩いてみると簡単に理解することが出来る。どの店も六十歳くらいのご老体が仕事をきりもりしていて、俺のような高校生や若者はそうそう見ることができない。鈴の話では六年前に戒さんと命さんがこの村にやってきて、個人出費で学校を建ててくれたとのことで、小・中・高あわせて約147名の生徒がそこに入学したらしく、少しだけ村の活気が回復したらしい。

個人出費で学校を建設するなんて、戒さんは一体どんな人なのだろうか？これはまた今度にでも直接本人に聞くことにしよう。

鈴の家に手紙と焼きたてのパンを置いた後、俺は村の少し外れにある寺島診療所へと向かっていった。名前からしてもう誰が診療所の所長かは容易に想像できるだろう？

小さな商店街を抜けると、もうそこには野菜畑と山へと続く舗装されていない一本道以外なものもなかった。まあこれはこれで道が分かりやすく助かるが、都会化している橋合町に住んでいた俺にとってはどこか寂しい気もする。しかし、それも中々居心地はいいものだった。

深呼吸をして肺一杯に酸素を送り込む。

（はあゝやっぱりここの村の空気はうまい・うつ）

肺を突かれたかのような変な痛み、そして一瞬呼吸ができなくなると同時に肺から喉へ、空気の塊送り込まれる。

「ゲホッゲホッ・・オエ」

・・・馬鹿なことをした。

そういえば俺の肺はまだ治りかけだった。どうやらずっと病室生活をしていたせいで頭の回転が悪くなったらしい。

時間をおくごとに胸が苦しくなってくる。おそらくこの発作はすぐに止むだろうが、それまではうまく呼吸ができそうにない。胸を押さえ、その場に座り込む。

「おい！大丈夫か！？」

右手のほうに広がる畑から発せられた声に反応すると、そこには見たことがあるような顔をした男が土を顔につけた状態で畑からこちらへと駆けてきていた。しかしその男はここまで来る時に見たようなご老体とは少し違う感じがした。

農業用の作業着のような少し汚れた長袖・長ズボンを身に着けた男は麦藁帽子をしていているうえに、顔の至るところに土をつけているため、その顔はハッキリと確認することができない。しかし、体型やこちらに向かって走ってきているその様子から俺と同一年くらいだということが見てとることができた。

「ゲホッゴホッゴホッ！」

うまく呼吸ができない。なんとか少しは酸素を肺へと送り込むことができないのでギリギリ現状維持はできるみたいだが、これ以上この発作が悪化するようなことがあればさすがにマズイかもしれない。

戒さんはもう少しで退院できると言っていたが、こんな調子でホントに大丈夫なのか？・・・もう少し退院の日時を先延ばしにしようかな・・・

そう考えつつも激しく咳き込んでいると畑から出てきた男は、予想したよりも早く俺の元へとやってきて背を擦ってくる。

「大丈夫か？もうすぐ退院とか言ってたのに・・・戒さんよんでくるか？」

（なんでそんなこと知ってるんだ！？）

麦藁帽子をしたまま顔を覗きこんでくるその男の顔はやはり見たことがあるもので、帽子と顔についた土さえなければ誰か特定できそうなのだが・・・

「だい・・・じょうぶです・・・すみません。あの・・・もしかしてどこかでお会いしたことがありますか？」

咳き込みながらも、なんとか喉から声を出す。どうやら少し発作は楽になってきたらしい、前よりは酸素を肺へと送り込むことができた。

「は？俺だよ俺！」

（誰？）

やはり想像した通り、声からして男は青年のようだ。自分の人差し指を土のついた顔にあて「俺だよ」という言葉を連呼する男だが、いっこうに頭にかぶった帽子を取ろうとしない。

頭を回転させるが、その間も男はまるで雨に濡れて壊れた音楽プレイヤーのように同じ言葉を繰り返している。

「俺だってば！」

男は俺が咳き込んでいるのを忘れているかのように、肩を揺らしてくる。さすがに一分以上同じことを同じように言われれば、いくら精神の強い者でも限界に達するといったものだ。

「だから誰だって！せめて帽子とか取れよ！じゃないとわからないだろ！」

そう言い返す。すると男は俺の行動を予想していなかったのか、その場から立ち、少し俺との距離をとり始めた。男の顔ははっきりとは分らないが、どこか「しまった」という表情を浮かべている「えっと・・・帽子はちよっと・・・あっ、もう咳止まったみたいだな、じゃあ俺はこれで！ちゃんと病院でおとなしくしとくんだぞ！」

男は俺の咳が止まっているのを確認すると、帽子をより深くかぶ

り畑の中へ走り去っていった。

男に言われたように、胸に手を当てると先程までの苦しさは消えていた。しかし、それ以上に今度は、体中に大量のアドレナリンが駆け巡る。

両拳を数回互いにぶつけ合う。するとアドレナリンが体に巡っており、脳へとやってくる痛みの信号が先程までより少ないことが確認できた。

（これならいける・・・）

その場に腰を落とした状態から、スタンディングベーション、つまり最も速くスタートダッシュをするための態勢をとる。そして目標物―畑の奥へと走っている男へと視線を送る。

俺をあんなに苛立たせておいて、その正体を明かさないとはい・・・それはつまり俺に喧嘩を売っているということだろう。

大量の酸素を一回の呼吸で、回復したばかりの肺へと送る。

「よおおおい・・・どん！」

体調が悪いものに気にせず、最高、最速のスタートダッシュをきる。そして、数ヶ月ぶりに足を可能なかぎり前へと進めた。

畑は縦に三層別れており、先程の男はもう一層目の終わりのまで足を進めている。同い年にしては中々のスピードだが、それでもまだ俺の方が速い。男が二層目の畑に足を踏み入れるよりも速く、俺は一層目の大根や人参を育てている畑の中間地点まで進んでいた。

「待ちやがれえええええ！」

体力に余裕があることを確認し、そう叫ぶ。すると数百メートル先を走っている男はこちらを見るや、その顔を真っ青にし恐怖の叫びをあげ始める。

「うああああああ、お前病人じゃなかったのかよおおおおお！」

目の前を駆けている男は俺を後ろを振り向くやいなや、先程よりも走るスピードを上げる。

そうして俺は二層目のキャベツを育てている畑へと足を踏み込む。数ヶ月ぶりの走りはどこか気持ちのいいものがあった。

今思えば、こうやって誰か人を追いかけるのって、俺初めてかもしれない……

気持ちが高ぶってくる。胸から溢れる高揚。別に男が叫び逃げるのが楽しいというわけではないが、これも俺にとっては初めての体験だった。

男が最後の層、三層目のビニールハウスが建設されている畑に入る。しかし、俺も少し遅れてそこへと足を踏み入れる。もうこの層を抜ければ後は山しかない。それにしても中々広い畑だな……男との距離はもう手の届く所まで来ていた。

「残念だったな！これまでだ！」

どうやら俺は足の速さでも体力面でも目の前の男よりも上をいつているのであろう。もう俺の手は男の背まで指一本のところへ来ていた。

「はあはあはあ！くそおおおおお！……すまん！」

俺が男の襟を掴む瞬間、視界から男の姿が消える。そして次の瞬間、俺は空を飛んでいるかのような錯覚に捕らわれた。男が下回し蹴りを俺にくらわしてきたのである。そのせいで俺は今少しの空中浮遊状態にあった。

全身に冷や汗と、それを急速に冷やす風を感じる。すると体は本能的に動き始めた。

空中で体を半回転させ、空中前周りを行う。風を切り裂いているかのような自然の音が鼓膜を振動させる。橋合町でイメージトレーニングと共に体を鍛えていただけあって、映画俳優でもワイヤーを使うとされている空中前周りはなんとか成功した。

「ふうふうふう」

勢いよく畑の地に両足を着地させると共に、肺に溜まった空気をゆっくりと吐き出す。そして啞然としていう男の方へと振り返り、勝利の笑みを浮かべる。

「惜しかったな……まあ普通の人じゃああの回し蹴りは避けられなかった。あんたいい蹴りしてるよ」

・・・かなり恥ずかしいことをしてしまった。

別に格好をつけたかったわけではないのだが、橋合町でしていたイメージトレーニングではいつも言っていた言葉だったので、これもまた本能的に出てしまったのである。

我ながら恥ずかしいことをしてしまったことに後悔しつつも、俺はその場で軽くステップを踏み、素早く男との距離を詰める。そして、やっとギブスの取れた右腕を男のかぶっている麦藁帽子へと勢いよく伸ばした。

「しまっ！」

男の頭上に先程まで頭に乗っていたはずの帽子が舞う。それと同時に太陽の光に照らされて男の顔がハッキリと確認することができた。整った黒髪、少し引き締まった顔をした男は数日前に病室であったー川瀬五木だった。

「あれ、五木？なんでお前がここに・・・」

俺の記憶が正しければ、今戒さんが建てた学校で俺と同じ年の生徒は全部で男女二人ずつの四人だけで、普段はほとんど自習状態ではあるが、学校に通っているとのことだったはずなのだが・・・

瞬間にして五木は宙に舞った帽子を取ろうとその場でジャンプを行うが、それよりも早く俺がジャンプをして帽子をキャッチする。なんだか体が勝手に動いたのだ。

地面に着地すると同時に五木が俺との距離を詰めてくる。そして俺が手にしている麦藁帽子へと手を伸ばしてくるが、それもまた本能的に腕を上へとあげて五木の手に渡ることを防ぐ。

すると五木は改めてといったふうに俺の前へと立ってきた。

「へへ・・・俺はこの畑をきりもりしてるんだよ。昔は爺ちゃんがやってただけだよ。結構前にぼっくり逝っちゃって。だから学校にはいつも行っているけど、たまに休んで野菜を育ててるんだ。とかもう帽子返してくれよ。俺の髪は陽光に弱いんだ」

そういつて両手で頭を、まるで陽光から庇っているかのようにのせる五木だが、その顔はどこか明るさの他にも不気味さも含んでい

た。

（これは絶対嘘だな・・・）

そう思い、未だに頭を押さえている五木を無視して、俺は手にしていた帽子の中身を確認する。すると中には数枚の写真が帽子の裏側に重ねて貼り付けられていることがわかった。

「なんだこれ・・・」

不思議に思いそれを外す。すると五木「あっ」と声を発した後、諦めたかのような表情を浮かべ、両手を腰へと移し俺に背を向ける。よく分からないが、恐らくこれは写真をみてもいいといったことを表した動作なのだろう。俺はゆっくりと一枚一枚写真を確認しようと、裏に向いている一枚目の写真を表へと直した。しかし、俺がみたものは間違いなく五木の本性そのものだった。

「お・・・お前これって・・・盗撮？」

写真全部で六枚程あったが、その一枚目は同い年くらいの女の子二名の写真だった。しかもその二名は、これまた数日前に病室を訪れてくれた鈴の女友達のものだ。

「お前、なんで・・・ゴフツ！」

写真の内容を見て、思わず吹き出す。写真は私服から、水泳の授業があったのか水着を着ているものまで、幅広く、撮影した本人が変態であることを容易に想像させるものが見て感じ取れた。

片手で鼻を押さえ、俺に背を向けている五木へと視線を向ける。すると五木はゆっくりと俺の方へと振り返り、まるで初めてあった時と同じように、何もかも悟ったかのような顔をし、俺の肩へと手を置いてくる。

「お前にはこれをやるよ」

そういつて俺の顔のすぐ近くにどこから取り出したのか“鈴が私服姿”をした写真を持つてくる。

「これをオカズにでもしな・・・金はいらないから安心しな」

そうして、かも当然かのように俺の手から写真を取り返そうとしてくる。そんな五木の頭を片手で掴み、俺はその手に握力を込める。

「鈴をオカズになんてできるわけないだろ・・・それよりおま」

言葉を言い終えるよりも早く、五木の両手が俺の両肩を固定する。瞬間的に、俺は握力の込めていた手を離し、彼の顔を見るが、彼はまるで間違った道を進もうとしている友人を止めているかのような表情を浮かべていた。

「これはお前の為にいつてやってるんだ！頼むから受け取ってくれ」
急に五木の顔つきが変わる。それはどこか悲哀を浮かべているような、表情をしていた。

「俺の為って、どういうことだよ」

肩にのった手をどけようとするが、五木の手は俺の肩をどうしても離したくないらしい。中々力の籠ったものとなっている。

「お前は・・・今危ない状態なんだよ。このままじゃ・・・鈴ちゃんにまで・・・」

そう悲哀に満ちた表情を浮かべる五木だが、それよりも俺は苛立ちを感じていた。

俺が鈴に手を出すはずがない。ましてはそんな犯罪行為をするなんて絶対じゃない。

そのことによる苛立ちが大声となって五木へと向けられる。

「俺が鈴に手をだすってのか！馬鹿も休み休み言え！」

そういつて勢いよく両肩に乗っている手をのけ、少し五木との距離をあける。だが、それでも五木はほぼ瞬間的に俺との距離を詰め、また両肩に手を載せてくる。

少し驚いて五木を見てみると、今回の彼の表情は俺に何かを訴えたいかのように力強いものがあつた。しかも、その瞳の奥には、何故か涙らしい液体が溜まっている。

「じゃあお前は今まで、いや今日まで何回鈴ちゃんの肌に触れた！言ってみろ馬鹿野郎！」

「はっ！何を・・・」

数秒にして五木の喉をからしてでも必死に訴えかけてくる言葉が、数ヶ月前に鈴を何回も抱きしめたこと、そして今でもたまに頭を撫

でてやっているということを脳裏に復活させる。そしてその瞬間俺はその場に膝をついた。

そうだ、今まで意識していなかったが、確かに俺は普通じゃあ考えられない程に鈴と接触している。それに人工呼吸とはいえ、あいつのファーストキスを奪ったという事実もあった。これは五木の言っている通り、このままいけば俺はいずれ鈴を押し倒すかもしれないということなのか・・・

「数ヶ月前、俺はお前の状態を調査するためにわざわざ鈴ちゃんに“メイドの格好”をしてもらった。しかしお前は俺の思っていた通り、それをまるで夢を見ているかのように見つめていた。あの時感じたはずだ“あの夢をこの手にしたい”と！・・・」

五木の言っていることは全て真実だった。確かに俺は“あの夢をこの手にしたい”とあの時強く願った。もしかして、五木が俺に声をかけてきたあの絶妙なタイミングは暴走しかけていた俺に対して危険と判断した五木が行った行動だったのかもしれない。

五木は喉を枯らし続ける。

「俺はお前が犯罪者になる瞬間なんて・・・鈴ちゃんが無理やり襲われるなんて・・・それも親友にだなんて・・・見たくないんだよ！」

瞳から大量の涙を流し、俺の肩を揺らして強く訴えかけてくる五木を見ていると、なんだか俺の涙腺もゆるくなってきた。こんなにも俺のことを思ってくれているなんて、嬉しい以上になにもなかった。

「・・・だから使ってくれ鮫我・・・頼む」

「五木・・・ありが・・・ッ！」

瞬間、俺は後方へとステップを踏み五木との距離を開ける。

危なかった。もう少しで俺は五木が行っていた“演技”の催眠に掛かっていたところだった。

五木にお礼を言おうとした瞬間、ほんの一瞬だけ見せた五木の本性。口を少し上へと吊り上げたその表情を俺は見落とさなかったの

である。

俺が距離を開けたことに驚いているらしい、五木の顔は、数秒としないうちに悪魔のような不気味な笑みを浮かべ始めた。それは、彼の“人を騙す天才”としての本性を表しているかのようだった。「チッ！まさか俺の演技を一発で見破ることができる奴がいるなんて思っても見なかったやるな鮫我」

そういつて涙を拭う五木だが、その顔は奥の手を封じられたことになにも動揺しているようではなかった。少し後方に後ずさり、さらに五木との距離を開ける。

もし、あの”天才的な演技“が奥の手でないとすれば、さらに恐ろしい”何か“を彼は隠し持っていることになる。今彼が浮かべている自信に満ちた不気味な笑みが、まだ奥の手を持っているということを経易に想像させるものとなっていた。

「とにかく褒めてやるよ。けどな、もう分かってると思うけど奥の手はまだ出してないぜ。ひひひっ、さあ地獄と天国。両方を味わうといい！くらえ！」

懷から数枚の紙を取り出す五木に対して、俺は力強く身構えた。攻撃面の奥の手ならまだ俺にも勝機はある。しかし、俺が次の瞬間見たものは天国のその中にある楽園だった。

頭上に五木が放ったとされる数枚の写真が舞い、その写真が俺の夢を天国へと導き、理性を地獄へと叩き込む。

写真は全て鈴のものだった。しかし、その内容は様々で、そのどれもが俺の理性を抉り殺していく。

（学生服！幼稚園服！警察官！バニー！作業服！メガネ！ポニーテール！・・・・・・）

頭の中が鈴の写真で埋まってくると同時に、理性が頭の中で激しい抵抗を繰り返す。俺の頭の中では第二次理性保持戦争が勃発していた。

「うあああああああああああああ」

頭を抑え、目を力一杯瞑り、外界からの攻撃を遮断する。しかし、

五木は俺の耳にゆつくりとヘッドフォンを付けたかと思うと、更なる攻撃を仕掛けてくる。

『お兄ちゃん？大丈夫？』

「ぐふあ」

どうやって録音したのか、鈴の「お兄ちゃん」という甘い声に思わず瞑っていた目を開眼させる。がそこに映し出されたのは、やはり天国の楽園だった。しかも今度は額に付けられたのだろう、鈴が白いスクール水着をきている写真が視界一杯に映し出される。

「白いスクール水着だと！あああああぁぁぁ！もう止めてくれえ
ええええええX！」

そういうと視界から写真が消えると同時に、今度は数十枚もの鈴の“コスプレ写真”が視界一杯を埋め尽くし、それが俺の理性に無限の地獄を与える。

「どうだ！俺の秘蔵コレクション！特に鈴ちゃんはお前の為といえ
ば積極的に協力してくれてな！ハハハハハお前は俺には勝てないん
だよ！鮫我！犯罪者になつて欲しくないなんて嘘だよ！俺と同類に
なれ！一緒にこの村で楽園を楽しもうじゃないか！ハハハハハハ」

胸が苦しい。心臓が異常な速度で心拍数を上げている。

（これはもう地獄じゃない……これは天国だ…….
うだよ天国だよ）

両腕が勝手に写真へと伸びていく、五木はまるでそれを待っていたかのように勝利の笑みを浮かべている。しかし、写真に触れようとしたその刹那、俺の脳は少しだけ稼動を始め、今までの記憶を呼び覚めます。

いまだ嘗て俺は誰にも、どんな勝負でも負けたことがなかった。それがこの村にきて、まさか精神面での敗北を迎えようとしているなんて……

そう思うと、俺の理性は微かに復活しはじめた。伸ばしていた手を引っ込めて、それを甘い夢を浮かべようとしている頭へと放つ。そして力強い視線を五木へと向けた。すると五木は俺の気迫におさ

れたのか一歩後方へと後ずさる。

「ハハ、やるな鮫我。まさかこの状況で復活するなんて、つくづくお前という奴は面白い！けどなお前の弱点はもう把握している。さあフィナーレだ！八条鮫我！俺がお前を天国の最上階まで連れていつてやろう！」

そういつて五木は手にしている単三電池で動く一昔前のCDプレイヤーのスイッチを押した。

しかし、俺の頭は先程自ら放った衝撃のおかげで、もう回復している。そして、五木が繰り出した数秒間の“地獄”を乗り切った俺はもう最強の存在といつてもいいだろう程に成長しているはずだった。「ふん！もう何をやっても・・・はっ！」

耳にしているイヤフォンから天使の声が聞こえた。そして頭の中では「プチンッ」という張り切ったピアノ線が千切れたように、俺の理性を支えていた無数の神経が一瞬で切れたような気がした。

・・・・・・

『おはようございますご主人様！もう朝ですよ起きてください！』

そこは豪邸の俺の部屋。扉を開いて出てきた彼女は“俺専属のメイド”である。熊本鈴。彼女は毎朝ちよど今と同じぐらいの決まった時間に俺を起こしにくる。少しでも意地悪をして、わざと俺を起こそうと声をかける鈴の言葉を見無視し、寝たふりを続ける

『ご主人様！起きてください！ご主人様！・・・どうしましょう。』

このままじゃまた執事長に怒られてしまいます。うっうえええん何故か一人で泣き出す。そして鈴の泣き声を本当の目覚まし時計代わりに俺はゆっくりとベットから身を起こし、「悪い悪い」といつて頭を撫でてやる。

『もう知りません！朝食の支度ができていますので、やはく準備ゆっ・・・うう、うええええん』

舌を噛んだことがよほど恥ずかしかったのか、そうして鈴は顔を真っ赤にして俺の部屋を後にしていつた。

こうして俺の生活は始まる。

・・・・・・違う！

イヤフォンから流れ出る鈴の音が止まると同時に頭を横に振り、不気味な勝利の笑顔を浮かべる五木へとその弱々しくなった手を伸ばす。

「どうした鮫我！お前の大好きなメイドさんだぞ！」

「やめろ！俺を解放しろ！」

そういつてイヤフォンを取ろうとするが、どうしてかイヤフォンに手をかけたところで手が自然と止まる。

「解放？開くのほうの“開放”と勘違いしてるんじゃないか？その証拠にお前はまだ夢の続きを聞きたがっているじゃないか！」

そういつて五木はより一層笑みに不気味さを増す。その顔はもう人とは思えない程に歪なものとなっており、俺の全身には恐怖と、意識していない快楽が駆け巡る。

「頼む・・・もう止めてくれ！」

「もう遅い！さあ鮫我！こちら側へ落ちろ！」

そういつて五木がCDプレイヤーのスイッチを押した。

頭の中にまた理想が構築されていく。

・・・・・・

『ご主人様・・・やっぱりこういうのは想い人の方やご友人の方々とするのがよろしいかと思うのですが・・・』

そこは豪邸の地下に建設してある、プールだった。今は夜ということもあるが、その他にも普段は誰も使っていないのだがそのプールも今日は特別だった。目の前ではバスローブで肌を隠した鈴が顔を赤面させ、モジモジとしている。そんな鈴に対して俺は「命令だ」とだけいつて先にプールへと飛び込んだ。

『やっぱり恥ずかしいです・・・きゃ！』

瞬間、プールの中からジャンプして鈴をプールへと落とす。すると身に付けていたバスローブは宙を舞い、白いスクール水着を身に付けた少女が、冷たい水の中へと姿を現した。

ガラスの外にある月から発せられる月光が、少女の穢れを思わせ

『冷たいですご主人様！もう何をするんですか！』

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
違
う！

理性が最後の抵抗を見せる。それが叫び声となって発せられた。頭の中の戦争はもう終戦間際となりつつあった。もちろんそれは理性の敗北を意味している。

「頼む……もう止め……」

瞬間にして五木の指がCDプレイヤーに放たれる。そうして俺の理想は最終地点へと到達しつつあった。そして同時に俺の意識は闇に包まれていった。

[illegible]

執事長の川瀬五木が丁重に礼を述べ、彼の後ろにいる数十人のメイドも彼と同じように頭を下げる。ただ一人熊本鈴を除いて……

父さんの会社がライバル社に乗っ取られて以来俺の生活は変化し
つつあった。その影響がこの執事・メイドの大量リストラだ。

『鮫我君！やったよなんとか立て直せた！これでもう生活も安泰だよ』

『では旦那様』

父さんの言葉に一番早く反応したのは五木だった。そして父さんは五木の顔を見た後、ゆっくりと首を縦に振る。

『なんと・・・ありがとうございます・・・ありがとうございます』

その場に泣き崩れる五木。そして彼の背後にいた数十人のメイドも互いに抱き合うなどして喜びを体全体で表現していた。

『ご主人様』

目の前に鈴の顔が現れる。その顔にはもう悲しみというものは浮かべられていなかった。それは嬉しくて、そしてその嬉しさを隠しきれていないといった顔だった。俺は彼女の名を優しく呼ぶ、すると彼女は静かに「はい」と答える。

「もう一度、いやこれからずっと俺についてきてくれないか」

そういうと彼女は少し我慢していたのであろう止まっていた涙をまた溢れさせる。

『いつまでも！お供します！ご主人様！いつでも貴方様のおそばに！』

そういつて彼女は力強く抱きしめてくる。

俺は彼女の顎に手をあて、それを自分の顔に近づける。鈴もそれを期待していたのか、ゆっくりと目を閉じる。そして・・・
駄目だ・・・駄目だ・・・駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！！！！！！

目をゆっくり開けると、そこには信じられない光景が広がっていた。

唇に柔らかな感触を感じる。しかしそれは望んでいない、決して認めたくないもの。

俺は開きかけている目を閉じ、「これが夢であってくれ」と強く

願
う
の
だ
っ
た
・
・
・
・
・

アカハラが飛ぶ島 < 雛14 > (後書き)

次の話の投稿はなるべく今回のように一週間後にしたいのですが、最近はなにかと忙しいのでもしかしたら不可能かもしれません。なるべく早めに投稿したいと思いますので、これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456y/>

アカハラが飛ぶ島

2011年11月14日03時29分発行